

---

# エンジェルストーリー

番人カイト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エンジェルストーリー

### 【Nコード】

N9831P

### 【作者名】

番人カイト

### 【あらすじ】

2012年 日本は大幅に科学が進歩した。

その産物として『魔力』、『異界』の開発もされた。

異界に住む生物は大きく分けて2種類いた

一つは『悪魔』。悪魔は『魔界』という人類が最初に発見した異界のみ

見られる生物である。

特徴は黒い魔力である。黒い魔力は飲み込む性質がある。強靭な

肉体も持つ

そして『魔界』は人間界の闇を管理している『異界』の一つである。次に『天使』。天使は『天界』に住む生物である。

『天界』は人間界の光を管理する『異界』の一つ

天使の特徴は白い魔力である。白い魔力は黒い魔力の対になっている。

だが黒い魔力を溜め込んだ天使は『墮天使』となる。

もう一つの特徴は純白の羽である。純白の羽は音の速さで飛ぶことができる。

そして天使と人間の子は『エンジェルチルドレン』と呼ばれる。

悪魔と人間の子は『デビルチルドレン』と呼ばれる。

## 力の覚醒

2005年 天界

天界のあちこちに黒い歪ができていた。そこから悪魔族がゾロゾロと天界に侵入してきた。

天界は紛争状態になってしまっている・・

天使族らは緊急用の結界へ集まっていた。

「お前ら何してるんだ！」悪魔族の前で少年が叫んだ。

「バカかお前は・・天界は悪魔族のものになったんだよ」

悪魔は高笑いしながら言った。

「俺がお前らを魔界に還す！」少年は左手に剣、右手にハンドガンを構えた。

少年は一瞬にして悪魔族の後ろにまわっていた。

「何!？」悪魔は後ろを向いたがそれは遅かった。

悪魔は腹を切られ倒れた。しかし、悪魔は『死の魔法』を使っていた。

天使の白い髪が黒く染まり、純白の羽が漆黒の羽になった。

「これは・・・『死の魔法』か・・・」少年は地面に膝をついた。

少年の体が足から灰になっていた。

「俺もここまでかよ・・・!」少年はそっぴいながら灰になった。

しかし、少年は死ぬ間に『純白の魔法』を使っていた。

天界に居た悪魔族は灰になり消え、天界の歪は塞がれた。

2020年 日本 神奈川県 横浜 N中学

校庭で生徒が集まっていた。

「これより魔法能力試験を行う。」校長が真剣な顔で言った。そういうと、生徒がそれぞれの先生の指示に従って動いている。

「面倒だな・・・どうせ無能力なのに・・・サボるか・・・」

俺の名前は柊亜紀人 2年1組 無能力

駄目な学生である成績は下の中、おまけに無能力

しかしなぜか分からないが背中におかしなタトゥがある。

「まあやってみればいいよ あきと」と後ろから女子が亜紀人に言った。

こいつの名前は清水 薫 2年1組 無能力

こいつは世間で言えばいわゆる幼馴染である。

「うるさいな 薫！」亜紀人は睨みながら言った。

「頑張ろうねあきと」と薫が笑顔で言った

おいおい・・・無視かよ・・・俺は体育館か。

#### 体育館

体育館では魔法試験をやっている生徒でたくさん居る

「面倒くさいな・・・無能力はステージの所か。」

「無能力の諸君、努力をしないとなんでもできないぞ！特に亜紀人君」

と俺を見ながら教師が言った。

この先生の名前は 木村 里 担任

こいつは無能力者担当の教師である。俺がもつとも嫌いな先生である

「無能力の諸君、鬼ごっこをするぞ」木村が黒い笑みで言った

やばい・・・これはいやな予感がするぞ・・・急いで逃げなければ！

「先生・・・頭が痛いんで保健室行っていいですか？」俺は頭を抑えながら言った。

よし・・・これで逃げられる。

「亜紀人君、今日は保健室のベットは空いてませんよ 行っては駄目です。」

木村が笑みを浮かべながら言った。

「えー・・・無能力者の試験をやるのでみなさん体育館から出てく  
ださい」

木村がマイクを持ちながら笑顔で言った。

そしたら無能力者以外の生徒がどんどん減っていった。

まずい・・・！ 本当にやばい・・・

「無能力者しかいなくなったので試験を始めます」

言いながら背中になにかを貼られた。

「内容は魔法鬼ごっこです」と木村がうつとりした顔で言った。

「何ーーーーー!!!!!!???」無能力者全員で言った

その時だった、体育館の入り口が鍵を閉められてしまった。

やばい・・・退路を絶たれた・・・！

魔法鬼ごっこことは、先生が鬼で始まり、魔法制限なし 鬼に触られたものは

補習を受けることになっている。

別名「補習送りの鬼ごっこ」と呼ばれている。

まずい・・・前は怪我人が出るほどの激しい鬼ごっこだった。今  
回は死者が

でもおかしくない。

「では始め！」先生が言った瞬間すごい人相で走ってきた。

無能力者達は全力で走っていった。

うちの学校は体育館が広い。野球ができるほどだ。 しかも障害物  
がなにもない

体力と足の速さが問われてくる。

「薫、一緒に行こう」走っていた薫に言った

ここで薫を仲間に入れておこう。きつと役に立つはずだ。

「いいよ・・・ あきと・・・」顔を真っ赤にしていた。

あれ?・・・なんで顔が赤いんだ? もう疲れているのか・・・

「亜紀人おおお！！！！」叫びながら先生が後ろから来た。まずい・・・ここは誰かを囿にしないと

近くに1年の生徒が居た。俺はそいつを先生の方へ押した。そいつは先生に捕まり補習送りにされた。

すまない・・・君の尊い命無駄にしないよ・・・！

先生がその生徒を補習室に入れるために一時いなくなったので休憩だ。

「ひとまず休憩か・・・。」俺は腰を下ろした

「あきと・・・。」薫が顔を赤くして言った。

俺は「何？」と言った。

「次の日曜日に・・・うちに来ない?? 料理作るからさ・・・。」

薫は小さい声で言った。

薫・・・体調でも悪いのかな・・・?

「いいけど・・・大丈夫か??」俺は言った

「本当に!? よかったよ・・・。」薫は笑顔で言った。

なんだ・・・大丈夫か・・・余計な心配かけるなよな・・・

先生が戻ってきた

もう帰ってきた早く逃げないと・・・

薫の手を引つ張りながら走った。

その時だった。黒い影が体育館の床から出てきた。

その黒い影は人型になり、先生の手を掴んだ

「なんだこれは・・・。」木村は掴んでる手を触りながら言った。

「・・・! これは・・・まさか・・・。」

先生が震えながら言った。

「女王ノエンジェルチルドレンハドコダ??」黒い影が言った

「ここにはいない!」先生が大声で言った。しかし

「ウソヲツケ!!」黒い影は怒ったように大声で言った。

黒い影は先生を投げ飛ばした。先生は壁に激突し、地面に倒れた。

「女王ノエンジェルチルドレンハドコダ・・・。」

こっちに向かつて歩いてきた。

いくら俺でもアイツの魔力を感じる・・・！ こいつはヤバイ・・・  
黒い影に男子生徒が殴りかかった。 しかし黒い影はすんなり避けた  
そして男子生徒の後ろにまわった。

「オマエカ？」と言いながら黒い影は男子生徒のシャツを破いた。  
「紋章ガナイ・・・。」黒い影はそういつと男子生徒を掴んで地  
面に叩きつけた。

「薫・・・裏から逃げるぞ・・・コイツはそうとうやばい・・・。」  
と俺は言い、薫と一緒にステージの裏にある裏口から逃げようとし  
た。

しかし、黒い影がもう亜紀人の後ろに居た。

「・・・オマエカ？ 女王ノエンジェルチルドレンハ・・・。」

その時、亜紀人の背中が光った。

「なんだよこれ・・・光ってる・・・。」黒い影は背中を見て呆  
然としていた

こいつは・・・まさか・・・教科書でしか見たことない・・・『  
悪魔』か・・・

「ソノヒカリ・・・キサマカ女王ノエンジェルチルドレンハ！」

黒い影が漆黒の槍を取り出した。

「オマエヲコロス・・・！！！」黒い影は亜紀人に向かってきた。

亜紀人は黒い影に殴りかかった。 しかし黒い影に吹き飛ばされる。  
しかし、亜紀人は後ろにまわった。

よし後ろを取った！

だが、黒い魔力が壁となり、亜紀人のパンチを防いだ。そして亜紀  
人は壁に投げつけられた

「ドウシタ？ 女王ノエンジェルチルドレン・・・。」と黒い影は言  
った。

黒い影は薫に漆黒の槍で攻撃した。 漆黒の槍は薫の左腕を貫通した  
薫は左腕を押さえながら、槍を抜いた。

「あきと！・・・そいつを倒してよ！」と泣きながら薫は言った。

黒い影は亜紀人を踏みつけていた。

「コレデサイゴダ・・・女王ノエンジェルチルドレン・・・」  
黒い影は漆黒の槍を取り出した。そして亜紀人の背中に刺す瞬間  
亜紀人の背中から純白の羽が生え、黒い髪は白い長髪になっていた。  
「ナンダト・・・今、『覚醒』シタダト!?」黒い影の漆黒の槍は  
粉々になっていた。

「お前・・・薫を傷つけただろ・・・！ 悪魔！」亜紀人は大声で言  
った。

亜紀人は白い鎌を取り出した。 亜紀人は一瞬にして悪魔の左手首  
を切断した。

「キサマ・・・!!! 『覚醒』シタバカリナノニソコマデウゴケ  
ルダト???！」

悪魔は驚いたように言った。しかし悪魔の左手首は再生した。

亜紀人は飛んで薫の所に居た。「大丈夫か？薫・・・」

亜紀人は薫を抱きかかえて2階に飛んだ。

「薫・・・ここに居るよ・・・」亜紀人は鎌を双剣に変換した。

「悪魔・・・絶対に許すわけにはいかない！」

亜紀人は一瞬にして悪魔の後ろに居た。

そして純白の双剣が悪魔を切り裂いた。しかし、悪魔は液状になり  
攻撃を受け流した。

「ナカナカヤルナア・・・ダガ魔法モ使エナインジャ・・・駄目ダ  
ナ・・・」

悪魔はそういいながら魔法陣を描いていた。

「漆黒ノ斬撃・・・」悪魔の魔法陣から黒い斬撃が無数にできた。

亜紀人はそれに反応できず直撃を食らってしまった。 亜紀人はボロ  
ボロになっていた。

「ぐっ・・・何なんだあの魔法は・・・」亜紀人は辛そうに言った。  
だが、亜紀人はふらふらになりながら立ち上がった。

「俺は・・・お前を倒す!!!・・・」亜紀人は双剣を日本刀にし  
た。

亜紀人の脳裏にある記憶がよぎった。

そうか・・・母さんの遺言の魔法を使えば！・・・

亜紀人は日本刀を構え、僅かだが魔力を装填した。そして・・・魔法名を唱えた。

「・・・疾風一閃！・・・」刀から白い斬撃が悪魔の居る方向に放たれた。

「バカガ！・・・俺二八結界ガルンダゾ！！」

悪魔は結界を展開した。しかし、白い斬撃は結界を紙のように切り裂いて、悪魔に直撃した。

「ソナバカナ！！・・・マサカ・・・女王ノ魔法力？！」悪魔はそう言い残し真つ二つになり消滅した。

だが、体育館の柱は斬撃のせいで全て斬られ崩壊寸前だった。

「まずい・・・体育館が・・・壊れる！！」亜紀人は最後の力を振り絞り倒れている生徒たちと先生を外に投げ飛ばした。

その瞬間だった・・・体育館がゴォー！！という鈍い音を出し崩れていった。

「なんとか・・・脱出できた・・・」亜紀人は校庭に倒れていた。

またあんな化け物と戦うのか・・・こりゃあ大変だな・・・

亜紀人は空を見ながら思っていた。

## 力の覚醒（後書き）

初めまして 番人カイトです>><  
これは初めて書いた小説です。

## 悪魔との戦い（前書き）

今回は第2話です。

よかったら読んでください

## 悪魔との戦い

日曜日

亜紀人の部屋

目覚まし時計がジリインという高い音が部屋中に響いた。

「ふああ……もう朝か……」

亜紀人はむくつと体を起こしながら言った。

まだ眠い……だけど……今日はあいつの家に行かなければ・

・

亜紀人はベットから出て、すぐに着替えをすませた。

そして1階にあるリビングに行った。しかし、家族の姿はなかった。

そっぴゃあ……父さん、今日出かけるって言ってたな……

机に2000円が置いてあった。しかも父さんの気持ちの悪いメモもあった。

なんか食べるものないかな…… と亜紀人はそう思いながら棚など物色していた。

チヨコパンが棚の上に置いてあった。

これは……俺が昨日コンビニで買ったものだっけ……

チヨコパンを食べている時、ポケットの中のケータイが鳴った。

げっ……薫からかよ…… と思いながらケータイをとった。

「薫……こんな時間に何のようだ？」と眠そうに言った。

「ごめんね……こんな時間にかけて……今から来れる??」と

寂しそうに言った。

「まあ……行けるけど……まだ7時だぞ……お前の両親はまだ居るだろ?」

「お母さんたちどこかに出かけたけど……あきとのお父さん行くって言ってたよ。」

そっぴゃうことか! 父さん……余計なお世話を……!

「まあ……行ってやるか……ちよつと待ってけよ……」と

行つて電話をきつた。

外に出て庭にある自転車に乗り、学校の近くにある薫の家に行った。薫の家のインターホンを押した。

「薫ー！ 来たぞー！」と亜紀人は行つた。

「あきと入つてきてもいいよ・・・」と薫がいい亜紀人は門を開けて家に入った。

薫の家はどつちかつて言うのと広く綺麗に掃除されていた。

俺の家なんて汚いのにな・・・

「あきと、こつち来て」と言われながら引きづられ来たのはリビングだった。

結構広く、結構整頓されていてそれ以外は普通のリビングだ。

おまけに液晶テレビの台の中の2重壁になっていておじさんのエロDVDが入っている。

それは俺にしか知らない裏情報である。

薫が台所で何かしら料理をしていた。ちよつぴり楽しみである。

「あきと〜まだ作つてるから、テレビ見といていいよ。」と薫が言つた。

俺はテレビのスイッチを付けた。そのニュースは偶然にも天界に関する歴史の特集だった。

天界の特集じゃん・・・この前のこともあつたし・・・見とくか。

「えー・・・続きましては天界の女王の物語をお送りします。」と司会が言つた。

VTRでは女王の活動や事件があつた。女王は最後には群集に魔法で殺されたとなつていた。

VTRが終わり司会のトークが始まつた。

「えー・・・女王はすごい活動をしたのに群集のせいで死刑にされてしまった悲しさがありますね」

「しかしながらこんな噂があります。それは女王には人間との子が居ることです。」

「女王は死刑にされる1年前に人間との子『エンジェルチルドレン』

を産んでいたという噂が広まっています。

「女王の死刑された理由はそれではないかと推測されていますね」

「その子供には女王の魔法が使える、最強の術式と魔力が宿ってる  
ということになります。」

その場合子供には王族の魔力が流れているので次期王の座がありますね」

亜紀人は目を大きくしテレビを見ながら驚いていた。

「なんだこれ・・・まさか悪魔はこの事を知っていた？ だとすると女王の子供は実在するということになる」

「あきと〜ご飯できたよ〜」とカレーとサラダを持ちながら薫は言った。

亜紀人はテーブルの椅子に座った。薫は亜紀人の前の椅子に座った。亜紀人はカレーにスプーンを出し、そして亜紀人は食べた。

「奇跡的に・・・美味しい・・・昔は不味かったのに・・・」亜紀人はお皿にあったカレーを黙々と食べた。

「奇跡的は余計よ〜・・・ずっと努力したんだよ・・・」薫は恥ずかしそうに言った。

「そうなんだ・・・昔より格段に上手になってる。」亜紀人は褒めながら言った。

「あきと・・・食べたなら私の部屋行く？」と薫は恥ずかしそうに言った。

「いいけど・・・どうせ汚いだろ？」亜紀人は笑いながら言った。

「汚くないもん！ 来て確かめてみてよ！」と言いながら薫は亜紀人に引きづって言った。

薫の部屋は思ったより整理されていて、どこにでも居る女の子の部屋だった。

「まあまあ綺麗だな・・・おっ・・・食ったら眠くなったからベット借りるな。」

亜紀人はベットに転がって寝転んだ。

「起きてよ、あきと〜一緒にゲームでもしようよ・・・」と悲しそう

に薫は言った。

「キスしてくれたら・・・起きてやる。」と亜紀人が言ったとたん・・・薫が黙った。

薫は亜紀人のほっぺに顔を近づけた。すると亜紀人が体を起こした。

「冗談だよ冗談。それより、ちよつと学校行かね？忘れ物したからよ・・・」亜紀人は笑いながら言った。

薫は下を向いていた。そして亜紀人拳骨を繰り出した。

「まあいつか・・・分かつたいこ・・・亜紀人。」とスッキリした顔で言った。

#### 学校

「げっ・・・蓮居るじゃん・・・」と亜紀人はいやそうに言った。

「おっ！亜紀人じゃん。」と誰かが走ってきた。

こいつの名前は黒藤 蓮 俺の悪友でもある。

人懐っこく顔も申し分なく、学校ではちよつとした人気なのである。

「お前・・・部活あったのか？」

「そうだよ。ってなんで薫ちゃんも居るわけ？」

「あいつの家で飯食って、そして忘れ物思い出して学校に来てんだよ。」

と俺らは薫には聞こえないほどの声の大きさを話していた。

蓮は気配を消して薫に話しかけた。

「薫ちゃん・・・まさか亜紀人に気持ち伝えてないの？ 亜紀人全

然気づいてなそうだよ。」

「うん・・・さっきも言おうとしたんだけど無視されちゃったんだよね」

と薫は残念そうな顔で言った。

「蓮・・・ちよつと忘れ物取りに言ってくるから薫を頼んだ！ じゃ！」

と亜紀人は言い、走って校舎の中に入った。薫はポツンと取り残

された。

「亜紀人・・・マジで鈍感だな・・・気づかないなんて・・・」と蓮は笑いながら言った。

その時、誰もが思いもしなかったことが起きた。

「おっ・・・あつた」亜紀人は教室で探し物をしていた。

その時だった、校舎のガラスがすべて大きな音を立てて割れた。

「これは・・・まさか・・・悪魔の仕業か！」亜紀人は震えながら言った。

そうするとケータイが鳴った。 薫からだった。

「薫そつちは大丈夫か!？」

「私は大丈夫だけど蓮は今・・・この前の黒い奴と戦ってる・・・。なんでまたあんなのが居るの・・・」

薫は震えながら言った。

「今どこだ!？すぐにそつちに向かう！」

「校庭のサッカーゴールのところに蓮と蓮が居るの・・・」

亜紀人は電話をきくと校庭に向かって走った。

「火炎車!!」蓮は炎の玉を悪魔に投げた。

しかし悪魔はビクともせず蓮の足を掴んで投げ飛ばした。

蓮はそれでもすぐに立ち上がった。

「まだ・・・開発中のスキルだけど・・・使えるかな・・・」

蓮は、両腕に魔力を集中した。

「完全炎化！」蓮は炎の精霊になった。しかし、少しだけ人間のままだった。

「まだ・・・40%つて辺りか・・・」

「亜紀人・・・早く来い・・・」蓮は悪魔に向かって走った。

だが、悪魔はこの時10分の1しか力を使っではいなかった。

「女王ノエンジェルチルドレンヲオマエハシツテイルノカ？」

悪魔は左手を蓮の方向に向けた。

「ダークフォース！」悪魔の手から黒い光線が放たれた。

ギリギリで蓮は避けた。しかし衝撃波を食らい、フェンスに吹っ

飛ばされた。

「やべえ・・・もう体が動かねえ・・・」蓮は気絶してしまった。

「トドメハサシトクカ・・・」悪魔は蓮の方向に手を向けた。

「シネ・・・」その時だった、亜紀人が悪魔の手を切断した。

「お前・・・蓮を・・・ここまでポロポロにしやがって・・・許させねえ・・・」

亜紀人の背中に純白の羽が生えた。

「悪魔！ お前を倒す！！」亜紀人は悪魔に刀を向けた。

「オモシロイ・・・」悪魔は少しだけ笑っていた。

## 亜紀人VS悪魔(前書き)

今回は結構、時間が掛かったちゃいました^^  
すみません><

## 亜紀人VS悪魔

悪魔は亜紀人に向かって魔法を唱えた。

「ダークチエーン！」地面から黒い鎖が亜紀人に向かってきた。だが亜紀人は一振りに鎖を切り落とした。

「ホウ・・・ソノ羽コノ純白ノ魔力・・・キサマ・・・エンジェルチルドレンカ？」

悪魔は亜紀人に問いかけた。

「だったらなんだよ・・・今は関係無いだろ・・・」

亜紀人は空高く飛んだ。

「マアイイカ・・・戦イヲ楽シモウ！！」悪魔は魔力を噴射して亜紀人の所に来た。

「死ソドケ・・・エンジェルチルドレン！！」悪魔は亜紀人黒い鎖で縛った。

悪魔は呪文を唱えた。

「悪魔ノ鉄槌！」悪魔の頭上から黒い手が亜紀人に向かって来た。

亜紀人は刀で鎖ごと黒い手を切り裂いた。

「何？・・・魔力ヲ使ワナイデ切り裂イタダト？」亜紀人は悪魔に向かって飛んで、悪魔の左腕を肩から斬った。

だがすぐに再生し傷口が塞がった。

「やっぱ・・・魔法を使わないと倒せないか・・・」亜紀人は翼を消して校庭に降りた。

その時だった、亜紀人に黒い光が直撃した。

「キサマ・・・気ヲ抜クナ・・・」悪魔も校庭に降りてきた。

亜紀人の上半身の服が消し飛んでいた。

「悪魔・・・お前を倒す・・・」亜紀人は立ち上がった。

亜紀人の背中を見た悪魔が驚いた。

「キサマ・・・マサカ・・・女王ノエンジェルチルドレンドトイウノカ・・・」

悪魔は亜紀人に向かって音速の速さで亜紀人の前に来た。

俺が・・・女王のエンジェルチルドレンなのか・・・？

悪魔は亜紀人を掴んで投げ飛ばされた。

「ヤット・・・見ツケタ・・・女王ノエンジェルチルドレン!!!」

「逃げる!!! 薫!!! 早く!!!」亜紀人は何かを感じたのか薫に大声で言った。

亜紀人は悪魔に向かって魔法を発動した。

「疾風一閃!!!!」亜紀人は高速で悪魔の体を切り刻んだ。

「魔法を発動させられたまるか・・・」亜紀人は悪魔を押さえつけた。

だが、悪魔は亜紀人を魔力で吹き飛ばした

「消シ飛べ!!!!」ダークインフィニティ!!!!」

悪魔が唱えた時、空が厚い雲に覆われそして黒い光が校庭に振り注いだ。

とてつもない衝撃波で周りの校舎や民家が崩壊された。

「ヤツタカ・・・」悪魔は膝を付き倒れそうになった。

「・・・俺は・・・まだ戦える・・・」亜紀人は直撃を食らいながらも立ち上がった。

蓮達は光の壁で守られていた。

「なんとか・・・魔法で・・・防げた・・・だけど俺は結構食らっちゃまった。」

亜紀人はふらふらになりながら悪魔に向かって歩いたが倒れた。

悪魔は亜紀人の頭を踏んだ。

「キサマノ真実ヲ教エテヤロウ・・・キサマハ女王ノ『力』ヲ受ケ

継イダ子デモアリ天界ノ英雄ノ生マレ変ワリデモアル・・・」

「ソシテキサマガ生マレタ時スグニ女王ハ牢獄ニ連レテ行カレタ・・・ソシテ才前モ連レテ行カレソウニナツタガ

父親ガ人間界に持チ帰ツタノダ・・・」

「俺が・・・エンジェルチルドレンだと・・・そんな馬鹿な・・・

」

「ソウイウコトデ・・・抹殺任務ガカセラレテイル・・・サラバダ・女王ノエンジェルチルドレン」

悪魔が亜紀人の背中に攻撃を加えようとした瞬間だった。

光の矢が悪魔の手に3本当たった。悪魔の腕は砂のように崩れていった。

「おゝ悪魔・・・何言ってるの・・・亜紀人から離れる・・・」

「亜紀人のお父さん!?」薫はびっくりしたように言った

「いやゝ君のご両親と食事してたんだけど悪魔の反応がしたから来てみたけど・・・悪魔・・・いらんことを言ったな。」

「オマエハ・・・柊 光・・・」

「親父・・・なんでここに・・・」亜紀人は苦しそうに言った。

「亜紀人、お前覚醒したのか・・・何重にも封印しといたのに・・・」

「まあお説教は後だ俺にまかせろ・・・」光は真剣な顔をして言った。

「んじゃ・・・治療もあるからちやつちやと終わらせるか・・・」

光はポケットから鎖を取り出した。

「開放・・・！」鎖が変化し、刀に変化した。そして悪魔の懐に入った。

「ソナバカナ・・・見エナカタ・・・人間如キニ懐ニハイラルトハ・・・！」

悪魔は呪文を唱えた。

「ダークヘルチエーン！」地面から無数の鎖が飛び出してきた。

だが光はいとも簡単に避けて悪魔の腹を刺した。

「年季が違うんだよ・・・」と光は言い、悪魔を切り刻んだ。だが高速再生した

「こいつは・・・スライム型の悪魔か・・・少しばかり・・・魔力を使うか・・・」

光は刀に魔力を集中した。

「雷神殺しの一振り・・・」巨大な雷の刀が出現し、目にも見えぬ速さで悪魔を真っ二つに切った。

「ソナバカナ・・・人間ニヤラレルトハ・・・」悪魔はそういい残り消滅した。

「終わったか・・・んじゃ・・・蓮君と亜紀人を病院に連れていかないとな・・・」

光は蓮を担いだ。

「薫ちゃんは亜紀人を頼んだ、先に病院に行つて手続きしとくから」光は『神速』を使い病院に行った。

「亜紀人を連れて行かなきゃ・・・どうやって行こうかな・・・。」  
「・・・大・・・丈・・・夫だ・・・なんとか歩いて行く。」

亜紀人は立ち上がったものの薫の背中に倒れた。

「やべ・・・体が動かない・・・」亜紀人は苦しそうに言った。  
薫は少し微笑んで亜紀人をおんぶして病院に行った。

亜紀人は病院に着いてからすぐに入院させられた。そしてすぐに手術も行われた。

10時間後

「よく・・・あの体で・・・動けましたね、両足骨折、左手首骨折、アバラ骨2本骨折、臓器損傷、  
普通の人だったら痛みで意識が吹き飛んでいますよ。光」  
弘樹はびっくりして言った。

大本 弘樹 光の親友で医者をやっている。

「そりゃあ・・・亜紀人はエンジェルチルドレンだから。」光は笑いながら言った

「そうだが・・・だけど光、昔に僕と一緒に何重にも封印したよね？」

「そこなんだよ・・・あのバカ無理やり封印を解きやがったんだ・・・。」

「マジかよ・・・女王の魔力を継ぐ者はすごいな・・・おい・・・」  
「伝え忘れたけど手術は成功し、一命は取り戻したから安心してくれよ光。」

「また封印するのか光？」

「そうだな・・・しなくてもいいんじゃない？ 悪いようには使つてなさそうだし」

光はニコニコしながら言った。

「そついやあ・・・亜紀人君を連れてきた子は？」

「ああ・・・亜紀人が寝てる病室に居るよ。」

「そつかい・・・あの子亜紀人君の彼女かな？」弘樹は笑いながら言った。

「さあ？ 友達だと思うがな・・・ずっと昔から一緒に居たし。」

「だけど・・・悪魔が出現してきたってことは・・・大変な事が起きるぞ。また俺らが活動するかもしれないかもな。」

「その時は・・・俺が命に懸けても亜紀人を守らなければいけないな・・・」

光はポケットの鎖を握り締めながら言った。

### 亜紀人の病室

亜紀人は病室のベッドで寝ていた。

薫は亜紀人の隣で亜紀人の手を握っていた。

「亜紀人・・・早く目を覚めて・・・」薫はさびしそうに言った。

「起きるわけないよね・・・手術したばかりだし。」  
その時だった、薫の手に痛みが走った。

「おい・・・誰が起きないだど・・・」亜紀人は薫を睨みつけながら目覚めた。

薫が亜紀人に抱きついてきた。

「よかったよ・・・亜紀人もう二度と目を開けないと思ってさ・・・」

薫は泣きながら言った。

「バカか・・・俺が死ぬわけ無いだろ？」亜紀人は笑いながら言った。

修行の始まり（前書き）

## 修行の始まり

悪魔との戦いから1カ月後

亜紀人は病院の屋上に来ていた。

「親父・・・何の用だ？呼び出すってことは人前では言えない事だろ？」亜紀人は光に真剣な顔をして言った。

「そうだ・・・お前に真実を言いたい・・・」光は寂しそうな顔をして言った。

「まずは・・・お前の事だ・・・あの悪魔からは大体の事は知ってるだろ？」光は亜紀人に問いかけた。

「ああ・・・あれは・・・本当なのか・・・俺がエンジェルチルドレンって言うのは・・・」

「ほとんど合ってるが・・・亜紀人・・・お前は本来の力が全く出せていない。」

「ちよつと待て！あれ以上の力が俺にはあるのか・・・親父？」

「ああ・・・ひよつとしたら俺以上の力が・・・」そういうと光は真剣な顔をした。

「お前は女王の力を秘めている、それは世界を滅ぼすかもしれない力だ・・・」

「なん・・・だ・・・と・・・そんな訳ないだろ・・・こんな落ちこぼれにそんな力はない！」亜紀人はびっくりした顔で言った。

「そして・・・今のお前は『天使』の魔力しか使ってない・・・人間の魔力は俺が封印し、使えないようにしてある。」

「なんだよそりゃあ・・・じゃあ俺は無能力じゃないのか・・・親父？」

「ああ・・・お前の人間の魔力はもしかしたら最高級並みだからな・・・危険だと思ひ封印した。」

「じゃあその封印を解いてくれよ！！俺は力がなくて蓮達ハイクラスが傷つ

いてしまってる……」

「そのつもりだ……じゃないとお前はこれからの戦い生き残れないからな。」

「これからの戦い？」 亜紀人は光に問いかけた。

「お前は女王のエンジェルチルドレン……世界を崩壊させるほどの力だ……悪魔たちが欲しがるのも無理もない。」

その力があれば世界を統一できる。そして背中にある術式に封印させられているのは英雄の魔力と記憶だ。

英雄の魔力と女王の力を合わせたら……とんでもないことが起きる……だからお前の魔力すべてを封印したんだ。」

光は亜紀人に真剣な目で言った。

「じゃあ……母さんは女王ってことかよ……俺にはそんな重荷は耐えられない……」 亜紀人は暗い顔で言った。

「そんな悠長なことは言つてられないんだ……お前は世界崩壊の中心に居るんだぞ……それがどういふことかわかるよな亜紀人……」

亜紀人は吹っ切れたような顔で言った。

「俺に……力を教えてくれ!! 親父!!」 亜紀人は光に頭を下げた。

「じゃあ病院の院長室に來い……修行を始める……そして蓮君、薫ちゃんにも修行をつける。」

「なんであいつらもなんだよ!!」

「そりゃあお前の真実をあの子達に言つたからな……そしたら修行するつつう事になったからな」

「そういうことで 院長室にさっさと來いよ。」 光は『神速』を使い、光の速さで消えた。

あいつらも俺は……巻き込んでしまうのかよ……

### 院長室

「おい! 親父來たぞ!!」 亜紀人は扉を強く開け、大声で言っ

た。

そこに居たのは光、蓮、薫、そして弘樹が居た。

「亜紀人、お前がエンジェルチルドレンって言うのは本当なのか……」

蓮が亜紀人に真剣な目で問いかけた。

「ああ……本当らしい……俺もさつき聞いたんだ……」

「光……いいんだな……あの部屋で修行するんだな？ あれはあの子達には無理だと思うが……」

「いいんだよ……『神速』も教えるからな。」

「OK……」弘樹は机を窓際にどかして床には扉があった。

扉が開き、階段が出てきた……。

「ここからは……命の保障はないぞ……それでもいいならこの階段を下っていけ。」光は真剣なけども悲しそうな顔で言った。

「分かつてる……親父……行つて来る……」

「俺も行くぜ！ 亜紀人！！」

「私も行く！」三人は光に堂々と言った。

「弘樹、後は頼んだぞ……俺は町を守るからな……」

「本気なのか……お前絶対に死ぬなよ」弘樹は悲しそうな顔で言った。

「親父……どういうことだよ……おい……！」

弘樹は亜紀人を抑えて扉を閉めた。

そして亜紀人達は階段を下っていった。

「なんだ……この馬鹿でかい所は……」

そこには大きさ5kmはあるであろう空間があった。植物、動物も生息していた。

「ここでの修行は……まずは『神速』を覚えることだな……」

弘樹はそう言い、壁にあるスイッチを押した。

亜紀人達は膝を付いた。

「なんだよこれ……立てねえ……」

「今2Gの空間にしたから・・・2日間毎に3G、4Gと重力を上げていくから。それで『神速』を覚える、

神速は上級悪魔との戦いには必要不可欠だからな・・・食料は自給自足だ！20日間生き延びろ！！」

亜紀人はふらふらになりながら立ち上がった。

「もう・・・立ち上がれるとは・・・さすがエンジェルチルドレン・・・」弘樹は驚いた顔で言った。

「上等だぜ・・・これからの戦いにはこんくらいしないと・・・死んじゃうからな・・・」

「おお・・・俺が亜紀人をサポートしないとイケないしな・・・」  
「私だつて・・・」薫、蓮が立ち上がった。

1日目

亜紀人達は歩いていた。

「マジででけーな・・・よくこんな金あるんだな・・・」亜紀人はぶつぶつ言いながら歩いていた。

「まあまあ細かい事は気にしないでまずは食料調達だろ」蓮は冷静に言った。

「けどよー体が重すぎてこれじゃ走れないぞ・・・」  
その時だった、魔法獣が飛び出して来た。

「げっ！！・・・魔法獣！？なんでこんな所に！？」亜紀人達はダツシユで逃げたが

しかしすぐに失速した。

「体が重い！！・・・最悪だ！！」

「しょうがない魔法を使う！」

「私も魔法を使います！」

蓮は魔法式を唱えた。

「完全炎化！！」蓮の体が炎化したけど足だけしか炎化が保てなかった。

「まあこれで少しは楽だぜ！」

薫は呪文を唱えた。

「水龍召還！」地面から水龍が現れて薫はその上に座った。

「せこいぞ！！薫！！」亜紀人は怒り気味の顔で言った。

「俺は人間の魔力が封印されているままなんだよな・・・」

あの糞親父め！！　なんで封印とかなかつたんだよ！！

「天使魔法其の一　白翼！！」亜紀人の背中に羽が生えた。

「よし！　これで疲れないぞ！！」

入院中に魔法式を親父がに教えてもらってよかった・・・！

だが白翼はすぐに消滅した。

「なんでだぁー！！！！」亜紀人は地面にもろに打った。

「痛つてーな・・・」放送らしきものが流れた。

「亜紀人君、ここでは白翼は使えませんよ　それは天使の魔力1

0分の1の能力しか使えないように術式を組んどいたから」

「先に言えー！！！！」亜紀人は即つつこんだ。

魔法獣が猛ダツシユで追ってきた

「マジかよ・・・どうやって俺は戦えば・・・」亜紀人は背中を刀を取り出した。

これは確か・・・親父が入院中に渡してくれた刀じゃねえか・・・

亜紀人は刀を抜いた、そしたら刀が光って、亜紀人の髪が白髪になり、紅い眼になった。

「なんじゃこりゃあ！！なんで勝手に天使化してるの！？」亜紀人はびっくりしながら言った。

亜紀人・・・お前なんだその格好は！？」蓮が驚いて声が震えながら言った。

「あきと・・・かつこいい・・・」薫は顔を赤くしながら小さく言った。

なんか聞こえづらかったけど無視しておこう

「んじゃ・・・魔法使うか！！」亜紀人は魔法獣に向かって構えた。

魔法獣は亜紀人に向かって走ったが避けられ亜紀人が後ろに回った。

「疾風一閃！！！！」魔法獣の急所を切って気絶させた。

「ふう・・・飯にするか・・・」

亜紀人達はこうして毎日を過ごし10日が経った……

## 修行の始まり（後書き）

なんとなく書いていったらあつという間に4話目になっていました

^^

これからも頑張つて親とかにはねないようにひっそりと活動するんで  
よろしく願います

あと

感想&アドバイスお願いします><

## 新たなる危機

「俺ら・・・結構強くなったんじゃないか？」

亜紀人は地面に座りながら言った。

「だよな・・・だけど結構疲れる・・・今確か7Gの空間だっけこ  
こ」

蓮は笑いながら言った。

「まだ俺ら『神速』使えないんだよな・・・どうやったらできるんだよ・・・」

亜紀人は頭を抱えながら言った。

「だけど・・・学校大丈夫かな・・・なんか10日間も休むことなんて無いからさ・・・」

薫は暗い顔をして言った。

「大丈夫だろ・・・テストも終わらせてもう終業式ぐらいしかないんだし」

俺はテストの時は松葉杖を付きながら学校にわざわざ受けに行っ  
たっけ・・・

「まあ・・・体力は前とは比べ物にならないぐらい強くなるし、魔力も強化されたし」

「そつだよな学校に居るよりこっちの方がいくらかマシだよしかも  
開発中のスキルも完成したし」

亜紀人達が雑談をしてる時だった。天井に小さなやつと人が通れる  
穴が開いた。

そこから黒い影が数体侵入してきた。

「ココニ・・・女王ノエンジェルチルドレンガイルンダナ・・・  
？」

「ソウダ・・・ココハ一人デ行動シヨウ・・・」

「了解・・・」

黒い影は3方向に別れた。

「じゃあ・・・飯調達してくるか・・・」

亜紀人はニコニコしながら言った。

「そうだね・・・俺は木の実でも採ってくるよ」

そう行つて蓮は北の方向の森に入つていった。

「私は川に魚採つて来るよ」

薫は西の方向にある川に行った。

5日前ふらふらになりながら見つけた綺麗な川だ。

独自の生態系ができており、俺らの貴重な食料の宝庫なのだ。

「んじゃ・・・俺は肉でも採つて来るか。」

亜紀人は南の方向に刀を取つて歩いていった。

「結構落ちてるな・・・練玉甘いんだよなたくさん採つてい」

蓮は落ちている練玉を拾つていた。

練玉とは、主に魔術師が食べる木のみである。

魔力が含んでおり食べたらずしだけ魔力が回復するといいわゆる

RPGで言うポーションみたいなものだ。

蓮が後ろに木の枝を投げた。

「出てこいよ・・・居るんだろ?・・・悪魔！」

「ホウ・・・ヨクワカツタナ・・・」

木の枝を投げた先には鎌を所持していた悪魔が居た。

「キサマガ・・・女王ノエンジェルチルドレンカ?!?!」

悪魔は蓮に向かって攻撃をしかけてきた。

「漆黒ノ炎!!」悪魔は鎌に黒い炎を装てんした・・・

「じゃあ俺も魔法を使おうかな!」蓮は手に魔力を集中した。

「王殺しの炎!」蓮の手に炎が灯り、剣の形になった。

「行くぜ!!悪魔!!」悪魔に向かって蓮は走った。

蓮は悪魔に向かって炎の剣を突いた。

しかし悪魔は避けて、鎌で攻撃しようとした瞬間だった。

蓮の炎の剣が盾になり鎌の攻撃を防いだ。

「ソノ魔法・・・特殊変動型力・・・」

悪魔は鎌を地面に立てた。

「悪魔ノ爪！！」地面から大きな黒い爪出て、蓮を攻撃した。しかし蓮は炎を剣にし、爪を切り裂いた。

「こんなもんかよ・・悪魔！！」

悪魔は鎌を構えて言った。

「全力デ・・行ク！！！」

悪魔は鎌を振りかざした。そして呪文を唱えた

「闇ノ開放！！！」鎌が悪魔の体に取り込まれて、悪魔の体に黒い羽が生え、

体が一段と大きくなった。

そして悪魔は蓮に魔法を唱えた。

「ダークチェーン！！」蓮の体に無数の鎖が絡まった。

「マジかよ・・これじゃ避けられねえ・・。」

悪魔が蓮の正面に立った。

そして悪魔は蓮にパンチを繰り出した。速い速度で繰り出した拳は鉄のように硬く威力は大きかった。

蓮はみるみる顔が赤く腫れてきた。

「この程度かよ悪魔・・。」悪魔は激昂し、蓮をさらに殴った。

「コレデ・・シンダカ・・。」悪魔は蓮の首を持った。

「誰が死んだって？ 死んでねえよ・・馬鹿が・・。」蓮はそう言って手に魔力を集中した。

「無駄ダゾ・・ソノ鎖ハ魔力ヲ打ち消ス能力ガアルンダゾ・・。」

「それがどうした・・。」蓮の体が紅く光った。

「術式完成・・完全炎化！！！！」蓮の体が炎になっていた。黒い鎖が溶けていた

「実践では初めてだけど・・やってみるか・・。」蓮は悪魔に炎の矢を放った。

悪魔はそれを避けたが、蓮は悪魔の前に居た。

「ナンダト・・速イ・・。」

蓮は悪魔にパンチを繰り出し、悪魔は数十m飛ばされた。

蓮は音速の速さで追いかけた。

飛ばされている悪魔の足を掴んだ。

「バカナ!!!?」蓮は悪魔を空中に飛ばし、蓮は魔力を噴射し、空中に飛んだ。

「これで終わりだ・・・悪魔!! 魔力を炎の剣に変換!!」蓮は普通の体に戻りとてつもない大きな炎の剣が手にあった。

そして悪魔の体を焼ききった。

「ソナバカナ・・・ヤラレルトハ・・・」悪魔は黒い塵になり消滅した。

蓮は地面に着地した。

「大丈夫かな・・・亜紀人、薫ちゃん・・・大丈夫かな?」

そう言い蓮は解散した場所に向かって歩いた。

「魚採れないな・・・しつかりしないと・・・」

薫は釣りをしていた。

「ああ・・・昨日は結構釣れたのに・・・この魔力の感じ・・・あきと達じゃないね・・・」

薫は木の影に水弾を飛ばした。木は倒れ悪魔の姿が現れた。その悪魔の姿は女の体で銃をもっていた。

「ワタシト・・・勝負ダ!! 清水 薫!!!!!!」

悪魔は銃を薫に向けた。悪魔は薫に向けて発砲した。だが薫はこの時、一瞬にして魔法を発動をしていた。

薫の周りには水の壁ができていた。銃弾は水の壁に弾かれた。

「キサマ・・・魔法が使エルノカ? データ二八無能力ノハズナノニ・・・」

「私だつて結構努力して魔力を付けたんだ。負けるはずがない!」

薫は水の壁を手に乗るぐらいの大きさにした。

そしてそれを弓の形に変えた。

「行くよ!! 悪魔!!」薫は弓を悪魔に向けて矢を発射させた。だが悪魔はそれを避けたが、薫に隙を付かれてしまった。

「バブルショット!!」薫は水の矢を5本同時に発射した。

悪魔は5本とも背中を貫いた。

「ガツ・・・オマエ・・・!!!」悪魔は銃を薫に向けた。  
「ダークフォース!!!」銃口から黒い光が放たれた。

その光が薫の肩に直撃し、薫の後ろの木が数本倒れた。

「肩が・・・腕が上がらない・・・!」薫は肩を抑えていた。

悪魔は黒い光を乱射した。

「やばっ・・・」悪魔の周りの木がすべて倒れていた。

周りには薫の姿がなかった。

「粉々ニナツタガ・・・手ゴタエ無イナ・・・」悪魔は立ち去ろうとした瞬間だった。

薫は川の中から飛び出してきた。

「食らえ!!! 悪魔!!! 水龍!!!」川から水の龍が出現した。

龍は悪魔に向かって攻撃したが、悪魔はあっさり避けたが後ろから龍の頭がでてきた。

「ナンダ・・・コレハ・・・!?!?」

龍は頭が二つあり尻尾が二本あった。

龍は悪魔を飲み込んだ。

「ソウ簡単ニヤラレテタマルカ・・・!!!」悪魔は銃弾を放ったが弾が押し返された。

「ナンダト・・・!?銃弾ガ貫カナイ?!」悪魔は苦しそうにもがえていた

「水龍の体の中は、物理攻撃は通じない・・・これで終わりよ・・・」薫が手を握った瞬間水龍の体の中が棘だらけになり収縮した。

悪魔は体を無数棘に貫通させられた。

「ソナバカナ・・・!!!」ワタシガ・・・死ヌナンテ・・・」

悪魔は消滅した。

薫は膝を付いて倒れた。

「魔力を使いすぎたわ・・・あきと・・・大丈夫かな・・・」

薫はそう言っただけで気を失った。

## 新たなる危機（後書き）

うーん・・・またなんとなく5話目終わったなw w

まずは読んでくれた人たちありがとうw

部活動もあるんで結構時間掛かりますがどうぞよろしくお願いしま  
す

第6話 新たなる敵（前書き）

うんやっテスト終了w

国語古文死んだwww

ってことで投稿だあ！！（、、）

## 第6話 新たなる敵

「俺ら・・・結構強くなったんじゃないか？」

亜紀人は地面に座りながら言った。

「だよな・・・だけど結構疲れる・・・今確か7Gの空間だっけこ  
こ」

蓮は笑いながら言った。

「まだ俺ら『神速』使えないんだよな・・・どうやったらできるんだよ・・・」

亜紀人は頭を抱えながら言った。

「だけど・・・学校大丈夫かな・・・なんか10日間も休むことなんて無いからさ・・・」

薫は暗い顔をして言った。

「大丈夫だろ・・・テストも終わらせてもう終業式ぐらいしかないんだし」

俺はテストの時は松葉杖を付きながら学校にわざわざ受けに行っ  
たっけ・・・

「まあ・・・体力は前とは比べ物にならないぐらい強くなるし、魔力も強化されたし」

「そつだよな学校に居るよりこつちの方がいくらかマシだよしかも開発中のスキルも完成したし」

亜紀人達が雑談をしてる時だった。天井に小さなやつと人が通れる穴が開いた。

そこから黒い影が数体侵入してきた。

「ココニ・・・女王ノエンジェルチルドレンガイルンダナ・・・  
？」

「ソウダ・・・ココハ一人デ行動シヨウ・・・」  
「了解・・・」

黒い影は3方向に別れた。

「じゃあ・・・飯調達してくるか・・・」

亜紀人はニコニコしながら言った。

「そうだね・・・俺は木の実でも採ってくるよ」

そう行つて蓮は北の方向の森に入つていった。

「私は川に魚採つて来るよ」

薫は西の方向にある川に行った。

5日前ふらふらになりながら見つけた綺麗な川だ。

独自の生態系ができており、俺らの貴重な食料の宝庫なのだ。

「んじゃ・・・俺は肉でも採つて来るか。」

亜紀人は南の方向に刀を取つて歩いていった。

「結構落ちてるな・・・練玉甘いんだよなたくさん採つてい」

蓮は落ちている練玉を拾つていた。

練玉とは、主に魔術師が食べる木のみである。

魔力が含んでおり食べたらずしだけ魔力が回復するといいわゆる

RPGで言うポーションみたいなものだ。

蓮が後ろに木の枝を投げた。

「出てこいよ・・・居るんだろ?・・・悪魔！」

「ホウ・・・ヨクワカツタナ・・・」

木の枝を投げた先には鎌を所持していた悪魔が居た。

「キサマガ・・・女王ノエンジェルチルドレンか?!?!」

悪魔は蓮に向かって攻撃をしかけてきた。

「漆黒ノ炎!!」悪魔は鎌に黒い炎を装てんした・・・

「じゃあ俺も魔法を使おうかな!」蓮は手に魔力を集中した。

「王殺しの炎!」蓮の手に炎が灯り、剣の形になった。

「行くぜ!!悪魔!!」悪魔に向かって蓮は走った。

蓮は悪魔に向かって炎の剣を突いた。

しかし悪魔は避けて、鎌で攻撃しようとした瞬間だった。

蓮の炎の剣が盾になり鎌の攻撃を防いだ。

「ソノ魔法・・・特殊変動型力・・・」

悪魔は鎌を地面に立てた。

「悪魔ノ爪！！」地面から大きな黒い爪出て、蓮を攻撃した。  
しかし蓮は炎を剣にし、爪を切り裂いた。

「こんなもんかよ・・悪魔！！」

悪魔は鎌を構えて言った。

「全力デ・・行ク！！！」

悪魔は鎌を振りかざした。そして呪文を唱えた

「闇ノ開放！！！」鎌が悪魔の体に取り込まれて、悪魔の体に黒い羽が生え、

体が一段と大きくなった。

そして悪魔は蓮に魔法を唱えた。

「ダークチェーン！！」蓮の体に無数の鎖が絡まった。

「マジかよ・・これじゃ避けられねえ・・」

悪魔が蓮の正面に立った。

そして悪魔は蓮にパンチを繰り出した。速い速度で繰り出した拳は鉄のように硬く威力は大きかった。

蓮はみるみる顔が赤く腫れてきた。

「この程度かよ悪魔・・」悪魔は激昂し、蓮をさらに殴った。

「コレデ・・シンダカ・・」悪魔は蓮の首を持った。

「誰が死んだって？ 死んでねえよ・・馬鹿が・・」蓮はそう  
言って手に魔力を集中した。

「無駄ダゾ・・ソノ鎖八魔力ヲ打ち消ス能力ガアルンダゾ・・」

「それがどうした・・」蓮の体が紅く光った。

「術式完成・・完全炎化！！！！」蓮の体が炎になっていた。黒い鎖が溶けていた

「実践では初めてだけど・・やってみるか・・」蓮は悪魔に炎の矢を放った。

悪魔はそれを避けたが、蓮は悪魔の前に居た。

「ナンダト・・速イ・・」

蓮は悪魔にパンチを繰り出し、悪魔は数十m飛ばされた。

蓮は音速の速さで追いかけた。

飛ばされている悪魔の足を掴んだ。

「バカナ!!!?」蓮は悪魔を空中に飛ばし、蓮は魔力を噴射し、空中に飛んだ。

「これで終わりだ・・・悪魔!! 魔力を炎の剣に変換!!」蓮は普通の体に戻りとてつもない大きな炎の剣が手にあった。そして悪魔の体を焼ききった。

「ソナバカナ・・・ヤラレルトハ・・・」悪魔は黒い塵になり消滅した。

蓮は地面に着地した。

「大丈夫かな・・・亜紀人、薫ちゃん・・・大丈夫かな?」

そう言い蓮は解散した場所に向かって歩いた。

「魚採れないな・・・しつかりしないと・・・」

薫は釣りをしていた。

「ああ・・・昨日は結構釣れたのに・・・この魔力の感じ・・・あきと達じゃないね・・・」

薫は木の影に水弾を飛ばした。木は倒れ悪魔の姿が現れた。その悪魔の姿は女の体で銃をもっていた。

「ワタシト・・・勝負ダ!! 清水 薫!!!!!!」

悪魔は銃を薫に向けた。悪魔は薫に向けて発砲した。だが薫はこの時、一瞬にして魔法を発動をしていた。

薫の周りには水の壁ができていた 銃弾は水の壁に弾かれた。

「キサマ・・・魔法が使エルノカ? データ二八無能力ノハズナノニ・・・」

「私だつて結構努力して魔力を付けたんだ 負けるはずがない!」

薫は水の壁を手に乗るぐらいの大きさにした。

そしてそれを弓の形に変えた。

「行くよ!! 悪魔!!」薫は弓を悪魔に向けて矢を発射させた。だが悪魔はそれを避けたが、薫に隙を付かれてしまった。

「バブルショット!!」薫は水の矢を5本同時に発射した。

悪魔は5本とも背中を貫いた。

「ガツ・・・オマエ・・・!!!」悪魔は銃を薫に向けた。

「ダークフォース!!!」銃口から黒い光が放たれた。

その光が薫の肩に直撃し、薫の後ろの木が数本倒れた。

「肩が・・・腕が上がらない・・・!」薫は肩を抑えていた。

悪魔は黒い光を乱射した。

「やばっ・・・」悪魔の周りの木がすべて倒れていた。

周りには薫の姿がなかった。

「粉々ニナツタガ・・・手ゴタ工無イナ・・・」悪魔は立ち去ろう

とした瞬間だった。

薫は川の中から飛び出してきた。

「食らえ!!! 悪魔!!! 水龍!!!」川から水の龍が出現した。

龍は悪魔に向かって攻撃したが、悪魔はあっさり避けたが後ろから

龍の頭がでてきた。

「ナンダ・・・コレハ・・・!?!?」

龍は頭が二つあり尻尾が二本あった。

龍は悪魔を飲み込んだ。

「ソウ簡単ニヤラレテタマルカ・・・!!!」悪魔は銃弾を放ったが

弾が押し返された。

「ナンダト・・・!?銃弾ガ貫カナイ?!」悪魔は苦しそうにもがえ

ていた

「水龍の体の中は、物理攻撃は通じない・・・これで終わりよ・・・」

薫が手を握った瞬間水龍の体の中が棘だらけになり収縮した。

悪魔は体を無数棘に貫通させられた。

「ソナバカナ・・・!!!」ワタシガ・・・死ヌナンテ・・・」

悪魔は消滅した。

薫は膝を付いて倒れた。

「魔力を使いすぎたわ・・・あきと・・・大丈夫かな・・・」

薫はそう言っただけで気を失った。

## 第6話 新たなる敵（後書き）

とまあ前書きとほとんど一緒かな

頑張って、小説続けるんでよろしくお願いします

コメントヨリ

## 第7話 新たなる力

「てめー．．．今までとは別格の強さの悪魔じゃねーか．．．」  
亜紀人は血を吐きながら言った。

「コレデ．．．オワリダ．．．柊 亜紀人．．．」

悪魔は亜紀人に刀を振ろうとした瞬間だった。

（数分前）

「これで肉はいいだろ」

亜紀人は猪の頭の上に足を着いて言った。

「今日はやっぱ炙り焼きかな．．．腹減ってきたな．．．」

亜紀人は何かに気づいたかのように後ろに魔力を集中した。

「いるんだろ．．．出て来いよ．．．」

岩の陰から誰かが出てきた。

「良く分カリマシタネ．．．魔力ヲ消シタシテスガ．．．」

悪魔は人間の姿で笑いながら言った。

「魔力なんか関係ねえ．．．気配で気づいた。」

「ソウデスカ．．．サスガデスネ．．．女王ノエンジェルチルドレ

ン．．．イヤ．．．柊 亜紀人．．．」

悪魔は亜紀人に向かって走ってきた。服の袖から10cmぐらいの針を取り出した。

亜紀人の腕に針を刺した。

「痛っ！ だけど俺はこんなもんじゃ倒せねーよ」亜紀人は針を抜いた。

「ソウデスカ．．．ダケド少シ魔力ヲ吸イ取リマシタケド．．．

大丈夫デスカ？」

「がっ．．．なんだ．．．魔力が体から出て行きやがる．．．」

亜紀人の体から白い煙が発生していた。その煙を悪魔は吸い込んで

いた。

「大丈夫デスヨ．．．10秒グライで魔力ノ放出八止マリマスカラ．．．」

悪魔はケタケタ笑いながら言った。

「お前．．．悪趣味だぞ．．．おい．．．」

亜紀人は刀を持って立ち上がった。亜紀人は刀を鞘から引き抜いた。

亜紀人は天使化をし、白い翼が生えていた。

「天使ノ技．．．其の一．．．『疾風一閃』！」

亜紀人は白い斬撃を放った。だが悪魔はその斬撃を素手で止めた。

「なんだ．．．と．．．」

「サツキノ魔力．．．使ツチャツタ．．．」

悪魔は笑顔で言った。

「ジャア．．．私モ魔法ヲ使イマスネ．．．」悪魔は地面に魔法陣を入力した。

「悪魔．．．中級魔法．．．第341．．．『黒池』！」

亜紀人が立っている地面が黒い池に変わった。そして亜紀人は足から池に沈んでいく。

「白翼！！！」

亜紀人は上に10mぐらい飛んだ。

「私モ飛ビマスネ．．．漆黒ノ翼！！！」

悪魔も漆黒の翼で亜紀人の元へ飛んだ。亜紀人は魔法を唱えていた。

「天使ノ技．．．其の一．．．『疾風一閃』！」

亜紀人は悪魔に白い斬撃を放った。悪魔は微かに、にやついた。

「ソノ技．．．モウ見切ツテイル．．．残念デスネ．．．」

悪魔は拳で斬撃を打ち消した。悪魔は亜紀人に向かって飛んだ

「マジかよ．．．拳で．．．」

悪魔は瞬時に亜紀人に音速の速さで殴った。亜紀人は下に落ちていく  
ぐはっ．．．マジかよ．．．今までとは別格だ．．．

「白翼！！！」亜紀人は翼で地面の直撃を防いだ。

「行くぞ・・・悪魔！！」亜紀人は悪魔に向かって飛んだ。  
そして悪魔に刀で攻撃したが素手で防がれてしまう。亜紀人は少し  
ひるんだ。

「馬鹿ナノデスカ・・・私ニソナ攻撃ハ通用シナイ・・・」  
悪魔は魔力を拳に込めた。術式が拳に浮かび上がった

「漆黑ノ拳！！」黒い魔力を帯びた拳を腹に殴られ、亜紀人は悶絶  
し、  
下に落ちた。

そして地面に直撃し、何箇所も体をぶつけた。そして気絶寸前の状  
態になった。

「がつ・・・動かねえ・・・」

悪魔は下に降りて来た。そして亜紀人の元に来た

「モウオワリデスカ・・・柊 亜紀人・・・」

悪魔は刀を取り出し、そして刀を亜紀人に向けた

「コレデオワリダ・・・」

悪魔は刀を亜紀人に振った。だが・・・亜紀人は素手で受け止め  
た。

「バカナ・・・動ケナイハズナノニ・・・」

亜紀人は立ち上がり刀を持ち、白い翼が生え、背中 of 術式が消えて  
いた。

亜紀人は悪魔に攻撃をした。

だが悪魔は避けたが亜紀人は悪魔に魔法を唱えた。

「天使ノ技・・・其の34・・・『純白の鎖』・・・」

亜紀人の左手から白い鎖が飛び出て、そして鎖は悪魔に巻きついた。

「キサマ・・・マサカ・・・ソナバカナ・・・」

「紹介が遅れたな・・・俺の名前はアルビス」カタルシス・・・  
「

「ヤハリ・・・英雄力・・・」悪魔は亜紀人に攻撃したが魔力で防  
がれてしまう

「オリジナルスキル・・・『アルビス』・・・」

亜紀人の姿が黒い長髪になり紅い眼が蒼い眼になった。

そして服はジャージから、白いマントと白い十字架の刺繍が入った黒服になった。

刀は鎌に変形した

「行くぞ．．．悪魔．．．」

アルピスは『神速』を使い、悪魔の後ろに回った。

「『神速』ダト！？．．．バカナ．．．」

「天使ノ技．．．其の18．．．『純白ノ剣』．．．」

鎌に純白の光が包み、白い剣に変化した。

「行くぞ．．．！！」そして、白い剣から巨大な白い斬撃が放たれた。

「魔法結界！！！！」

悪魔は何重にも魔法封じの結界を張った。悪魔は少し微笑んでいたが斬撃は結界をすり抜けて悪魔に直撃した。

「バカナ．．．結界ヲすり抜ケタダト．．．」

「『純白ノ剣』の斬撃は自由に形を変える事ができる。そして斬撃を一旦風にし、

結界を通った後斬撃に戻した．．．お前は光の魔力によって消滅が始まる．．．」

「ソナコトガ．．．足ガ．．．！？」

悪魔の足が灰になっていく。そして悪魔は回復に凶ったがそれは無駄だった。

「助ケテクレ．．．オネガイダ．．．頼ム．．．」

「戯言を言うな．．．お前は直に消滅する．．．」

アルピスの姿が亜紀人の姿に戻った。

「やはり．．．急な．．．変身は長く持たないか．．．早く終わらせるか．．．亜紀人が目覚めてしまう．．．」

「天使ノ技．．．其の三 『純白ノ舞』」

アルピスは悪魔を一瞬にして何十箇所も切り刻んだ。

「これで．．．終わりだ．．．悪魔．．．」

悪魔は白い光に包まれて消滅した。

「交代か……」 背中のタトウの術式が元の状態に戻り、亜紀人は倒れた。しばらく気を失っていた

「あきと！……大丈夫？」 亜紀人は薫の膝の上に頭を置いていた。

「俺は……！」 亜紀人は体を起き上がらせた。

「悪魔と戦って……だけど……俺……記憶がないんだよな……」

「勝ったから良いじゃんそんなこと……」 薫は笑顔で言った。

亜紀人は少し顔をひきつっていた

「それもそうか……さつさと戻って飯食つか……」 亜紀人は立ち上がり

亜紀人は猪を引きずりながら薫と共に戻っていった。

「今日は鍋だな」 亜紀人は笑いながら言った。

薫はうなずいた。

それから……10日が過ぎた。

亜紀人、蓮、薫は飛躍的なレベルアップを果たした。

## 第7話 新たなる力（後書き）

6話終了w

いやあ亜紀人君どうなっちゃうんだろう・・・（作者でも今迷ってますw

学校の授業中でもネタ考えてるのでまあなんとかしますw

どうぞ応援よろしく願いします><

バレンタインやだな・・・orz

もらえないし・・・

## 修行成果！

院長室の床下の扉が鈍い音をたてながら開いた。

「ふう……やつと戻ってきたな……」

亜紀人はジャージがボロボロになっており、体が擦り傷だらけだった。

「やつとだな……」

「そうだね……長かった……」

薫と蓮も上がってきた。

「めっちゃくちや体が軽い」

亜紀人はジャンプした、そしたら天井に頭をぶつけた。

「痛った……だけど結構筋肉も付いたな……」

「俺なんか腹筋や、腕がボコボコしてる」

蓮は笑顔でニコニコ笑いながら言った。

「だけど……親父と院長がいないな……」

亜紀人達以外には誰も居なかった。

「そういえばそうだね……」

薫は端にあつたテレビをつけた。

「大変だよお……隣町が……大変な事に……」

「なんだと……見せてみる！」

テレビには崩壊した町悪魔の姿が映っていた。

「なんだと……俺らが地下に居る間にこんな事に……」

亜紀人は外を見た。だが普通の風景だった。

「こっちはまだ悪魔の被害が無いみたいだな。」

「ああ……そうだな……まずは親父達を探すぞ……」

亜紀人は窓を突き破った。

「白翼！！！」 亜紀人の背中に白い翼が生えた。音速の速さで飛

「『神速』！！！」

「『神速』！！！」

蓮と薫は『神速』で飛んでいた。

「マジかよ・・・隣町は壊滅状態だぞ・・・」

亜紀人が見たのはビルや民家が崩壊し、悪魔がゾロゾロと居た。境界には結界が張られていた。

「この結界・・・まさか親父達が張ったんじゃ・・・」

「とりあえず下に降りよう・・・」

亜紀人達は下に降りた。そこには光、弘樹が居た。

「親父！・・・こんな所になんぞ？」

「帰ってきたのか・・・亜紀人・・・今説明する・・・弘樹頼む・・・」

「今・・・僕たちは町全体に結界を張っている、今境界で戦っているのは先生達や警察、中高生達がしている。

君たちも戦線に行ってくれ・・・僕たちは結界で手が離せないんだ・・・」

弘樹と光は地面に座った。

「分かった・・・蓮、薫行くぞ！・・・」

亜紀人達は『神速』を使い境界に向かった。

「あの子達『神速』を短期間で習得しましたね」

「ああ・・・『神速』は本来人間の魔力で発動するんだが・・・亜紀人また封印を壊しやがったか。」

#### 境界付近

「結構・・・人が居るな・・・」

境界付近には警察や先生達が居た。そして悲しいことに戦いで死んだ人達の死体も山積みになされていた

「おお・・・亜紀人！！」

大声で木村先生が言った。

「げっ・・・なんで先生がここに・・・」

「亜紀人・・・早く避難しなさい・・・大人たちがしますから。」

亜紀人を先生が結界に封じ込めた。

「出せよ!!! 先生!!!」

「駄目です・・・無能力者なんですから・・・そこで黙っていてください。」

「うるせえ・・・出せよ・・・俺も戦わせろよ!!!」

「駄目です・・・」

その時だった、亜紀人達の前の結界に小さな穴が開いた。そこから悪魔が出てきた。

「まずい・・・!!! 侵入してきた!!!」

木村先生は呪文を唱えた。

「在るべき所に還りなさい・・・『魔封』!!!」

だが悪魔は魔封を打ち消した。

「馬鹿な・・・消された?・・・」

悪魔は木村先生に攻撃した。

「先生!!!・・・」

木村先生はすぐに立ち上がった。

「シネ・・・下級生物ガ・・・!!!」

悪魔が攻撃を加えようとした瞬間、亜紀人が結界を打ち消し、悪魔の腕を切断した。

「何やってんだあ・・・悪魔!!! 先生に指の一本も触れさせねえ・・・」

亜紀人は刀を鞘から抜いた。

亜紀人は天使化した。

「亜紀人・・・お前・・・まさか・・・エンジェルチルドレンなのか・・・?」

「ああ・・・先生離れて下さい・・・危険ですから・・・」

「白翼!!!!!!!」 亜紀人は白い翼を生やした。

「キサマ・・・エンジェルチルドレンか・・・」

亜紀人は悪魔の後ろにまわっていた。

「天使ノ技・・・其の一『疾風一閃』!!!!!!」 悪魔に白い斬撃が放

たれた。

悪魔は白い斬撃を食らい、消滅した。

「先生……早く……結界を塞いで下さい……」

「分かった。」

木村先生は結界に術式を書いて結界の亀裂を塞いだ。

「お前……天使化すると……結構変わるな……蓮君達とは一緒じゃないのか？」

「蓮達は今来てますよ、それより……どうしてこんなことに……」

「それはお前が休んでから2日目だったな、私がお家に帰ってテレビを見ていると

ケータイが鳴ってな……ニュースにしたら、近くに黒い歪が出来ていると報道されていてな

8日ぐらい経ったぐらいかな、隣町にも黒い歪が出来てしまって、隣町の住民はこっちに避難し、町全体は悪魔に

壊滅させられたんだ……」

「そうだったのか……先生……」

「亜紀人……お前休んでるとき何してた？」

「え〜と……家で寝てました。」

「嘘を付け」

「なんでこつも素早くツツコミするの?!」

「どうせお前の事だから、地下にでも居たんだろ。」

「大体当たってる……なんでこの先生勘が良いんだ？」

この時、結界に大きな亀裂が入った。

そこから巨大な20mぐらいの悪魔が入ってきた。

「何だよ……このおおきさ……普通の悪魔のでかさじゃねーぞ……おい……」

亜紀人達はその場に立ち竦んでしまった。

無理も無い……巨大な魔力の威圧が亜紀人達に放っていたからである。

「行くぜ・・・修行の成果見せねえとな・・・」

亜紀人は巨大な悪魔に向かって飛んだ。

しかし悪魔は口に魔力を集中し、集まった魔力を亜紀人に向かって放った。

「何！？・・・避けきれねえ・・・」

亜紀人は魔力に直撃した。

そして強く地面に叩きつけられた。

「亜紀人！！私の生徒を傷つけるとはな・・・許すものか・・・」

木村先生は札を取り出した。

「浄化しろ・・・『純白の札』！！」

木村先生の魔力が札にみるみる吸い取られてしまう。

「ここまでとはな・・・最強の魔法の1部なのに・・・」

札が悪魔に向かって放たれた。

「いつけ・・・」悪魔に札が張り付いた。悪魔は剥がそうとするが剥がれなかった。

札が白く光り悪魔の黒い魔力がみるみる消えていく。

「さすが・・・『純白の魔法』・・・すげー・・・」

木村先生はそう言って倒れた。しかし、悪魔は完全に消えなかった。

「グオオオオオオオオオオ！！！！」

悪魔は木村先生に向かって走り出した。その時だった、悪魔の足が斬られた。

悪魔の後ろには、上半身裸で下のジャージもぼろぼろで刀を振った亜紀人の姿があった。

「サンキュー・・・先生・・・時間稼ぎしてくれて・・・」

亜紀人はペタツペタツと音を立てながら悪魔に向かって歩いた。

「悪魔・・・これで終わりだ・・・」亜紀人は刀を構えた。

「天使ノ技・・・其の五・・・『疾風一幻斬』！！！！」

悪魔が盾に真つ二つに斬られた。悪魔は消滅した。

「やったか・・・後の始末は親父がやってくれるか・・・」

亜紀人は体中を光らせ呪文を唱えた。

「天使ノ技……其の九十九……『純白の魔法』……」  
亜紀人の体が光った。

半径10kmの範囲が純白のやさしい光に包まれた。

黒い歪は消え、悪魔は一瞬にして消滅した。

「これは……『純白の魔法』……亜紀人がやったのか……」  
光はその光を見つめていた。

「これで……悪魔たちは消滅する……亜紀人君お手柄だよ……」

「これまさか……亜紀人の魔力か……」

蓮達もその光を見つめていた。

そして純白の光が消えた。

「くっ……ここまで魔力を消費するとは……」

亜紀人は膝を付きながら呼吸が荒くなっていた。

そこに蓮達が来て、亜紀人を抱えた。

「先生……大丈夫ですか？」 蓮は先生に問いかけた。

「ああ……大丈夫だが……亜紀人君が……」

先生は亜紀人を見つめた。

「大丈夫つすよ……それより……亜紀人の真実分かりましたか？」

「ああ……大体な……だが・亜紀人がエンジェルチルドレン  
なんて信じられない……」

「慣れれば大丈夫……これは誰にも言わないで下さい……亜紀  
人が狙われます……お願いします……」

蓮は真剣な眼で先生に言った。

「そんなことは分かっている……お前らも……地下に居たの  
か？」

「そうですね……なんで分かるんですか？」

「勘だ……」先生はキツパリ答えた。

「そうですね……」

蓮はちよつとビビりながら言った。  
そして1ヶ月が経ち、夏休み前になった。

**修行成果！（後書き）**

ほんとあつという間に7話ですね（爺さんか！w）  
まあ勉強も忙しくなってきた・・・orz  
暇な時に投稿するんでよろしくおねがいます><  
またテストいやだな・・・

## 9話 不幸な伊豆旅行

学校では、終業式に入っていて、生徒は体育館に集まっていた。

「ふああ・・・あれから一ヶ月経ったんだよな・・・」

亜紀人は隣に居た薫に話しかけた。

「そうだね・・・学校もすっかり修理して・・・新しくなってるし  
学校は先生達と魔法大工のみなさんが手伝って学校を魔法で修理し  
たらしい」

材料とかは足りないのは手配して集め、普通の修理より材料費が掛  
からなくて結構安くできるのだ

「しかしな・・・めんど・・・宿題あるし・・・」

亜紀人はため息を立てていた。

校長の話はまったく聞く気が無く、生徒は先生達に聞こえないよう  
に話していた。

「おい・・・夏休みどこ行く?」

「俺、彼女できたからお前とは遊ばないよ・・・」

「お前、この事がばれたら学年の男子に殺されるぞ・・・」

「分かってる・・・ってなんでみんな俺の後ろに居るの? ちょっ  
と待ってよ おい!」

亜紀人の後ろで鈍い音が響いていた。

「こいつを後で廊下に縛り付けておけ彼女に恥ずかしいところを見  
せ付けるんだ」

「了解!!!」 一斉に男子生徒10人が口を揃えて言った

リーダー格がなぜか恐ろしい事を言ってるような・・・しかもど  
つかの小説で読んだような・・・

そんな事がありながらも終業式が終わった。生徒は先生の指示に従  
って動いていた

亜紀人は蓮と話しながら歩いていた

「ふああ・・・眠い・・・もう帰れるな・・・」

「そうだな・・・亜紀人・・・お前予定あるか？」

「別に無いけど・・・それがどうした？」

「いや・・・なんでも無い・・・」そう蓮が言って、蓮は薫の方に走った。

そして蓮は薫に話しかけた。

「薫ちゃん・・・亜紀人にまだ『あれ』言ってないの？ 早く言っただろうがいいと思うけど」

「そうだけど・・・ちよつと言えなくて・・・」

「そっか・・・早めに言つとけよ・・・駄目だったら俺が後押ししといてやる」

「ありがとう・・・蓮君」

薫は亜紀人に方に走った。 蓮は何故か笑っていた。

「亜紀人・・・言いたいことがあつてさ・・・」

「なんだよ・・・さつさと言いやがれこつちは夏休みの宿題をどう終わらせるか考え中なんだよ」

薫の心拍数がとても多くなった。

「一緒に海に行かない？・・・蓮君も誘つただけど・・・」

「いいけど・・・」

「マジで!？」

「おお・・・別に良いけど・・・これ・・・他の男子にばれたら俺が殺されるから声のボリューム下げて」

「うん・・・えつとね・・・1泊2日の泊まり旅行なんだよね・・・」

薫は他の人に聞こえないように亜紀人に言った。

「泊まりか・・・OK・・・準備しておく・・・」

「うん・・・」なぜか薫は笑顔で返事をした。

退屈な先生の説明が終わり、見たくもない通信簿が返却されてきた。俺が通っている学校は5段階評価だった。魔法教科もあるから50点満点なのだ

「あきと〜成績どうだった？ 私は39だったよ」

「俺は・・・46だ・・・魔法教科が1で後は5だ・・・」  
「そうなんだ・・・あきと・・・魔法教科以外はちゃんと受けてるもんね・・・」

「さっさと帰ろうぜ・・・教室の男子が騒いでるから・・・ってなんで俺の周りに男子が囲ってんの・・・」

亜紀人の周りには男子が5人円状に囲んでいた。

「あきと・・・貴様・・・女子と帰るのか・・・」

「羨ましいというより・・・妬ましい・・・」

「清水と下校とはすごいぜ・・・その幸せ俺にくれよ・・・」

「そうだ・・・あきと・・・顔が格好いいからって調子乗るんじゃない・・・」

「独り身の男子の気持ちが分からないんだ!!!!!!!!!!!!」

亜紀人に向かって男子5人が殴りかかってきた。

「無能力でもこの人数だったら勝てるぜ・・・あきと・・・!」

亜紀人は魔法を使おうとした時、亜紀人の足に枷をつけられた。

「なっ・・・!」

「これはな・・・『魔法封じの枷』つつてな・・・人間の魔力を封じるんだよ・・・」

「くそ・・・魔法が使えねえ・・・なんてな・・・全開で行くか・・・」

亜紀人は足に魔力を集中させた。そして枷が外れ、周りに居た男子5人が吹き飛んだ。

「よし、これで逃げれる・・・」亜紀人は薫の手を引っ張って走った。

### 学校の帰り道

「疲れたな・・・少し魔力使っちゃったし・・・」

「けど・・・魔力使えたの?」

薫は亜紀人が『純白の魔法』を使ったときに、父親に魔力を封印さ

れた事を知っていた。

「そうだけどな・・・封印されたのは人間の魔力99%で少ししか使えないんだけど、天使は大丈夫なんだよ・・・」

「そうだったんだ・・・最近悪魔出てこないね・・・」

「ああ・・・なんかおかしいんだよな・・・悪魔が出現しないのは・・・」

「旅行の日程は、7月28日ね今からちょうど1週間後だから、集合時間は朝の8時ね、場所は駅ね」

「OK・・・だけど何処に行くんだよ・・・？」

「伊豆だよ」 薫は笑顔で言った。

「ふーん・・・そっか・・・んじゃ・・・家の前に着いたからじゃあな」

いつの間にか亜紀人は家の前に居た。そして薫に手を振って家に入っていた。

壁の後ろに吹き飛ばされた内の男子1人と女子1人が居た。

「あきと・・・あいつ・・・清水と蓮と海に行くのか」

男子の名前は大山 健斗 水能力

「妬ましいわ・・・清水薫・・・亜紀人様と一緒に海なんて・・・」

女子の名前は 中本 恵 雷能力

「ちよつと良いこと考えたんだが・・・」

健斗と恵が相談した。

「OK・・・いいわ・・・」

「おう・・・あいつらを潰そうぜ・・・特に亜紀人待ってるよ・・・」

健斗と恵は黒い笑いをしながら帰っていった。

「準備しないとな・・・」 亜紀人は家で荷物を準備をして、急いで宿題をやっていた。

7月28日 AM7:45 場所 駅

「ふああ・・・何処だ・・・薫は・・・？」

亜紀人の服装は 半袖で短パンで黒いスニーカーを履いていた  
亜紀人はリュックを持ちながら薫を探していた。

「ごめんごめん・・・待ったあ？」

薫の服装は白いワンピースで可愛いサンダルを履いていた  
亜紀人は見ずに漫画を読んでいた

「あきと〜蓮君は？ まだ来てないの？」

その時だった、亜紀人ケータイが鳴った。 蓮からだった。

「蓮か？ 今何処に居るんだ？」

「それがさ・・・用事できちまって行けないからさ・・・二人で行  
つててくれない？」

「はあ！？ おい！ つて切れたし・・・」

「蓮君どうしたの？」

薫が問いかけた。

「実はな・・・蓮来れなくなっただってよ・・・二人で行け  
だつて・・・最悪だ・・・」

「ええ！！？ そうなんだ・・・」

薫は顔を赤くした。

「もう・・・いこ・・・早く行かないとき・・・」

薫は恥ずかしそうに言った。

「それもそうだな・・・」

二人だけでもいつか・・・

亜紀人達は改札を抜け電車に乗り込んだ。

ロビーには大山と中本が居た。

「行くぞ・・・あいつらを潰しに・・・亜紀人妬ましい・・・」

大山は呪いのように言った。

「格好いいわ・・・亜紀人様・・・」中本は亜紀人を見つめていた

「そろそろ行くぞ・・・中本」

「そうね・・・行くわよ大山！」　大山と中本も亜紀人達と同じ電車に乗った。

電車内

亜紀人、薫はちょうど二人分空いていて、二人一緒に座っていた。

「何時間かかるんだ？」　亜紀人は薫に問いかけた。

「えっとね・・・昼には着くよ・・・ちょうど2時間後かな」

「そうか・・・その間何しておこうかな・・・ゲームでもしておこうかな・・・」

亜紀人はリュックからゲーム機を取り出し電源を付けた

隣の車両に大山と中本が居た。

「中本・・・亜紀人の写真を最初に渡しておく・・・」

大山は中本に亜紀人の着替えや運動しているところが写っている写真を渡した。

「わあ・・・亜紀人様だあ・・・ありがとう　大山！」

中本は写真をすぐさまにカバンの中に入れた。

そしてすぐに大山に何かを渡した。

「これ・・・約束の物よ・・・」

「サンキュー・・・中本これで・・・亜紀人を潰せる・・・」

大山は黒い笑みを浮かびながら言った。

そして亜紀人達は1時間後伊豆に着いた。

## 10話 伊豆での戦い

伊豆

「やっと着いたか・・・」

亜紀人は眠そうに言った。

「そうだね・・・あきと・・・」

薫は笑いながら言った。

「だけだよ・・・もう少しで通りすぎしそうになってたんだぞ

・・・」

「それ・・・あきとが寝ていて起こすのに大変だったんだよ」

亜紀人と薫の何気ない話がホームに響いていた。

「つて・・・どこに行く？ 薫」

亜紀人は薫にだらつとした顔で言った。

「そうだね・・・まずはホテルにチェックインしてそれから海かな」

「おいおい・・・チェックインは4時半だろうが・・・まっ・・・早

く行っても大丈夫か・・・」

亜紀人は薫に軽くつつこんだ

「そうだね・・・最初に海に行く？」

「そうするか・・・駅は海から結構近いし、歩いて行くか・・・」

「うん・・・分かったよあきと・・・」

亜紀人には見えない柱の後ろに大山、中本が居た。

「あきと・・・なんだあのラブラブなムードは・・・許せねえ・・・

俺はこんな変態野郎と一緒になのに・・・」

「こっちのセリフです。 清水薫・・・亜紀人様と一緒にとは許しま

せん・・・」

二人は呪いのオーラをだしながら言った。

そんな事もよそに亜紀人達は海に向かって歩き出した。

白浜

亜紀人は蒼い炎の模様の入った水着を着て砂の上に寝ていた。

「暑い・・・最悪・・・いつまで待たせるんだ薫は・・・」

亜紀人が愚痴を言ってる時に薫が来た

「・・・やつと来たか・・・ん？・・・」

亜紀人は薫を見て少しだけ驚いた。無理もなかった。

薫の水着は青い水玉のビキニで胸が強調されていたからである。

「お前・・・なんて格好を・・・」

亜紀人は女の体にはほぼ免疫がなく、顔が赤くなった。

「大丈夫だよ〜あきと〜普通の水着は締め付けられてやだからさ普通はこの格好なんだ」

薫は笑顔できつぱりと言った

「だけど・・・それ・・・ちよつとやり過ぎじゃね・・・」

亜紀人は薫を見ずに答えた。

それを薫が亜紀人の首を自分の方に向けた。

亜紀人は限界に達し鼻から鼻血がどばどば出た。

「ぐは・・・最悪・・・」

亜紀人は膝を付き倒れた。薫が驚いていた。そして薫は亜紀人の元に行った

そんな状況を大山たちは見ていた。

「亜紀人・・・殺す・・・絶対に・・・」

大山の隣で中本がカメラを画像を見ていた。

「たまりません・・・亜紀人様の水着姿、恥ずかしい顔・・・」

「何やってるんだ・・・作戦に入るぞ・・・」

大山は中本の肩をポンと叩いた。

「OK・・・清水薫・・・殺ります・・・」

大山たちは黒い笑いをしながら海に入った。

「んじゃ・・・鼻血も止まったし・・・泳いでくる・・・」

亜紀人は薫の姿を見ずに行った。

「待つて・・・私も行く・・・」

薫はカバンからゴーグルを取り出した。だが泳ぐ気がなくなりイ  
スに腰掛けた

そして亜紀人達は海に入ってしまった。

「やつぱ気持ちいいな・・・海は・・・」亜紀人は気持ちよさそう  
な顔で言った。

そして亜紀人は海の中に潜った

結構綺麗なんだな・・・

その時だった、亜紀人の足に何かがつついた。

亜紀人はそれを外そうとしたが無駄だった

なんじゃこりゃあ！！やべえ・・・息が・・・

亜紀人を中心に魔法陣が展開された。

「水魔法・・・『水牢：亞苦亞』」

亜紀人は水の檻に閉じ込められた。

「マジでやべえ・・・しょうがねえ・・・魔力を・・・」

亜紀人は1m以内に魔力を放射した。檻は壊され、亜紀人は水上  
に出ようとした。

これは・・・人間の魔力・・・どっかで感じたような・・・

亜紀人は水面の上に立った。

「はあ・・・はあ・・・誰だよ・・・こんな事したのは・・・」

水の中から蛇が飛び出してきた

「そんな物効かねえ！！！」亜紀人は水の蛇を素手で壊した。

「ほんとに誰だこんな事をするのは・・・俺にでも恨みがあるのか  
！」

その時だった、亜紀人は何者かに水の中に引きずり込まれた。

「がっ・・・」

亜紀人水底に叩き落とされた。

なんだよこんな悪趣味な奴は・・・

亜紀人の前には水の球状の中に入っている人が居た。

「よお・・・あきと・・・」そいつは大山だった。

亜紀人は周りの水を弾き飛ばして空気が入ってる空間を作った。

「大山か・・・こんな悪趣味の事をしやがって・・・」

亜紀人は大山に睨みつけた。大山は少しびびった。

「俺様よあ・・・ム力ついてるからよあ・・・お前には苦しんでもらうぞ・・・」

大山は笑いながら言った。亜紀人はバックに入ってる刀を魔力を使い亜紀人の手の上にあつた。

そして鞘から刀を抜き、大山に向けた。

「後悔したって・・・遅え・・・大山覚悟しろ・・・」

亜紀人は天使の魔力で白い尻尾を創り出した。

「天使の魔法・・・其の一・・・『疾風一閃』！！！！！！」

白い斬撃が大山に向けられて放たれたが、すぐに消滅した。亜紀人は驚いた。

「なんだと・・・そんな馬鹿な・・・」

「お前・・・水の抵抗があるから普通は発動できないが・・・そんな事もしらなかったのか？」

大山は高笑いしながら言った。亜紀人は戸惑っていた。

「お前はなんで・・・魔法が・・・」

「そりゃあ・・・水の中で唯一まともに使える魔力は水だからな・・・」

大山はそう言つて細い棒を取り出した。

「水魔法・・・『水槍』・・・」

細い棒は水を纏つて大きさは1mを越えている槍になった。

「行くぞ・・・」大山は水の中で魔力を後ろに噴射し、亜紀人に向かつてものすごい速さで襲い掛かつてきた。

大山は槍を突き出したが亜紀人はギリギリで避けた。

だが、槍は亜紀人の肩にかすつた。

「ぐっ・・・」亜紀人は痛そうに肩を抑えた。

「お前・・・ほんと・・・悪趣味だな・・・」亜紀人は大山に睨みつけた。少しだけ大山はびびつた。

「へっ・・・あきと・・・お前この状況分かつてんの？絶対絶命だ

よ？」

大山はふざけた素振りで行った。

「マジ……きれた……」亜紀人は体全体に魔力を集中した。

「水中じゃ……お前は魔力を扱うことができねえことが分かっているのか……」

「天使ノ技……其の壱拾四……『純白の槍』……」

亜紀人の左手には純白の槍が召還されていた。

「食らえよ……大山!!!!!!」

亜紀人は槍を大山に向かって投げた。大山は微動だにしなかった

「馬鹿か……魔力が使えねえ……って……はあ???!」

槍は水の抵抗に負けずに速度を衰えずに大山に向かってきた。

「馬鹿な……こんな事が……この魔力の感じは俺が感じてきた魔力とはまったく別の感じがする！」

大山は焦っていた。亜紀人は睨んでいた。

「お前は知るわけねえ……これは『天使の魔力』だ……反省してもう二度とこんな事ができないように入念に魔力を入れてた。」

槍は大山の胸を貫いた。

「がっ……痛え……」

大山は意識をぎりぎり保っていた。

「その槍は生物を攻撃できねえ……だが……魔力を吸い取る能力を持っている。」

大山の魔力がみるみる吸い取られていく、そして大山は魔力を全て失い水の上上がった。

「畜生……こんな事が……」大山はしばらく動けなかった。

「一つだけ……いい事を教えてやるよ……」

「何だよ……」亜紀人は返事をした

「清水 薫はもうじき……やられるだろうな……」

「どういうことだよ!!? おい！」

「さあな……さっさと助けに行ったらどうだ？」

薫が危ない……早く合流しなければ!!!

「白翼！……！！……！！……！！」

亜紀人は背中に白い翼を生やして、すぐに薫の元に向かった。

## 11話 白い鎌

亜紀人が大山と戦っていたとき

薫は、海の家の前にあるイスに座っていた。

「亜紀人・・・まだかな・・・」薫は少し寂しそうな顔をして静かに呟いた。

薫は、急に立ち海沿いを歩き出した。

しばらく経ったとき砂から何者かがでてきた。

そして薫に不意打ちを仕掛けた。

薫はギリギリで避け、何者かは海に潜った。

「誰？ 攻撃してくるのは・・・」

海から水の弾が3発薫に向かってきたが薫は全て避けた。

海から中本が出てきた。

「中々やるようですね・・・清水 薫・・・」

中本は静かに微笑みながら言った。

「中本さん・・・私になんか用？」

「あなたを始末します・・・亜紀人様にくつつきすぎです・・・」

中本は水着の裾から針を取り出した。

「装填・・・水の剣・・・」

針が水の剣に包まれた。

「行きます・・・」中本は薫に向かって水面を走って攻撃したが

薫は『神速』を使い中本の後ろに回った。

「え！？ いつの間に後ろに！？」中本は方向を変更したが遅かった。

「バブルショット・・・」薫は水の弓で水の矢を1発放った。

だが中本は後ろに水の壁を創り、矢を防いだ。

「なっ！？・・・」

中本は水の剣で薫を数十m吹き飛ばして、薫は水中に入っていた。その後を中本が追いかけた。中本は剣を銃にし、薫に向かって弾

を撃った

だが薫はまた『神速』を使い弾を避けて水面にでた

「なんなんですか・・・あなたの魔法は?!」

「これは・・・オリジナル魔法よ・・・あなたには一生分からない物よ・・・」

薫は構えた。水面に巨大な魔法陣が組み込まれた。

「魔力装填完了、『水龍』!!!」

薫の後ろに巨大な水の龍が召還された。

しかし、水の龍は姿を保てず、水の中に入っていった。

「やっぱ・・・大きいのは少し無理があるか・・・だけど・・・一瞬持てばいいわ・・・」

薫は中本の後ろにまわった。

「何?・・・なんでまた・・・」中本は針を後ろに投げたがそこには薫はいなかった。

「こつちよ・・・」薫は中本の目の前に居た

薫は手を中本の方向に向けた。

「喰らいなさい・・・水龍!!!」海から水龍が現れて、中本を飲み込んだ。

中本は脱出を図るがそれは無駄だった。

「私は負けてたまるかあ!!!!!!」中本は黒い液の入った瓶を取り出した。

その黒い液を中本は飲み込んだ。そして中本の周りに黒い魔力が放たれて水龍が破裂した。

「何で?・・・水龍が・・・」中本は黒い魔力を纏った。

「イクわよ・・・清水・カオル・・・」中本は左手に黒い魔力を集中した。

そして黒い球体が創られた。

「ダークネス・・・グラビティ・・・」黒い玉は破裂し、周りに散った。

そして周りの重力が強くなり、薫は水の中に落ちていく。

「何これ……まさか……悪魔？ いや……中本さんは人間だし……」

中本は薫の足を引っ張り水面に投げて中本はそれを追いかけた。

「人間にこんな事ができるわけない……まさか……」

中本は薫の首を左手で掴んだ。

「ソウよ……黒い液は『悪魔の血』隣町で集めたの……だけど……副作用があつて……」

中本の腕から大量の血液が流れ出ていた。中本はきつそうな顔をしている。

「小時間ならなんとか動ける……」中本は右手を挙げ魔力を集中させた。

黒魔法術式が右手に組み込まれた。

「闇魔法……『ダークネス・ライトニング』!!!」

中本の右手に黒い雷が纏った。

「これで終わりヨ……清水 カオル……」

中本は薫に電撃を放とうとした。だが中本は急に苦しみだし、水面に上がった。

薫も水面に浮かび上がった。中本の背中に黒い翼が生え、目の周りには黒いタトゥーが浮かび上がった。

その姿はまるで悪魔のようだった。

「殺ス……」中本は、薫の頭を掴み投げ飛ばした。

薫は水面を跳ねながら浜辺に飛ばされた。だが薫はふらふらになりながら立ち上がった。

「あれは……もう悪魔……」薫は悲しそうな顔をしながら術式を組み込んだ。

「水剣!!!」薫は水剣を構えて、中本が水面に出てくる所を狙うようにした。

そして悪魔が出てきた。

「終わりよ!!! 中本さん!!!」 薫は中本の腹を水剣で突き刺した。

だが中本は液状になった。

「これは・・・まさか・・・分身!?」 中本は薫の後ろに居た。

「これで終わり・・・ヨ・・・」 中本は黒い雷を右手に纏わせた。そして薫の背中に電流を流し込んだ。薫は倒れ、蹲った。

「あっ・・・ぐっ・・・」 薫は気を失ってしまった。

「とどめをささないと・・・」 中本は右手の黒い電流を薫に向けた。

だが中本は少しよろついた。

「時間が・・・」 中本は体勢を立て直した。

そして薫にとどめをしようとした瞬間、純白の光が周りを包んだ。

そして純白の翼を生やした亜紀人が薫の元に居た。 亜紀人は薫を介抱した

「大丈夫か?・・・薫・・・」 亜紀人は悲しそうな顔で言った。

薫は頭を縦に振るとまた気を失った。 亜紀人は薫の体をそっと砂の上に置いた。

亜紀人は鞘から刀を抜き、 白い翼を生やした。 亜紀人は魔力を周りに放ち、周りの砂が巻き上げられていた。

亜紀人は中本を睨んだ。 亜紀人は刀を構えた。 刀を上へ上げそして魔法名を静かに唱えた。

「天使ノ技 其の一 『疾風一閃』・・・」 中本に向かって白い明らかにもつものとは違う大きい斬撃を放った。

中本は避けたが、亜紀人は中本の後ろにまわっていた。 亜紀人は魔法を唱えた。

「天使ノ技 其の五・・・『疾風一幻斬』!!!!」 亜紀人は今己が出せる最大の魔法を放った。

疾風一幻斬は使用者の感情や魔力によって色や形が異なっていく。幻斬は漆黒で範囲は10mはある巨大な斬撃だった。

中本は避けきれずに幻斬に直で斬られた。 右肩から脇腹まで深く斬れた。

中本は倒れそうになるが全力で立っていた。

「まだ……倒れないのか!!!!」 亜紀人は怒鳴った。  
そして刀を次は右側に横にして 魔法名を唱えた。

「天使ノ技 其の五 『疾風一幻斬』!!!!」 横に大きい範囲で放った。

中本は避けようとするが魔力が尽きていたのか魔法を発動できなかった。

「なんで……魔法が使えないの…… 助けて……」中本は泣いていたが亜紀人はそんな事は気にしていなかった。

幻斬は中本にまたしても直で斬れた。だが薄く斬れただけで両手に大きな薄い切傷ができていた

亜紀人の白い翼は消え、海の中に落ちていった。

やべえ……魔力を使いすぎた……

亜紀人はすぐに浮き上がろうとするが体が言うことを聞かなくどんどん沈んでいった。

まだ倒れてはいけないんだ……絶対に……

その時、亜紀人の背中の中の術式が光だした。そして術式は消え、亜紀人は猛スピードで水面に出た。

そして浜辺に飛んだ

亜紀人は刀を鎌に変えた。そして鎌を立てて魔法名を唱えた。

「天使ノ技 其の二十一 『天使幻縛葬送』!!!!」  
鎌の所から無数の光の剣が飛び出し、中本に向かって剣が飛んでいく。

だが中本は水から浜辺に走っていき、術式を書いていく。中本の右手が黒い影に侵食されていく

「『悪魔激葬槍』!!!!」 中本の術式から黒い槍が召還された。

中本はそれを掴み、剣に向かって走り出した。中本は剣を弾き飛ばしていく。

亜紀人は飛び、中本に向かって鎌を振りかざした。

「これで……終わらせる……」 亜紀人は魔法を唱えた。  
「疾風葬送!!!!」 亜紀人は鎌で中本を切り刻んだが、中本は立

ち上がった。

「くっ……こいつは……どんな体力を……」亜紀人は鎌を構えた。

だが急に亜紀人は膝を砂に付けた。

「やべっ……限界か……」 亜紀人の鎌は剣に戻ってしまった。

「くっ……一発の魔法が限界みたいだな……」

亜紀人はふらふらになりながらも立ち、剣を構えた。

「天使ノ技 其の一……『疾風一閃』!!!」 白い斬撃が中本に向かつて放った。

中本は魔法を使おうとすることができなかった。

「力が……」 中本に斬撃は直撃した。 みるみる中本の黒い影は消え、姿が元に戻った。

亜紀人は力尽きて倒れ、背中 of 術式が元に戻った。

亜紀人は夕方まで気を失った。

## 12話 突然の通達

### 旅館

「痛つ・・・やっぱ安物じゃ、そんなに効かないか・・・」

亜紀人は椅子に座りながら傷を治していた。

「ただ・・・科学の進歩はすごいな・・・昔は治すのに時間かかっていたって聞いてたけど」

「これがあれば10分だもんな・・・」

薫はなんかバツクをいじっていた

「おいおい何してんだよ薫・・・」

亜紀人は薫に問いかけた。

「え？ お風呂の準備だけど？・・・」薫の手には下着や浴衣があった。

亜紀人はそれを見た瞬間外の方を眺めていた。

「俺・・・今傷治しているから先行つとけよ・・・」

「OK・・・先行つとくね」

薫はタオルとかを持って風呂へ行った。部屋は亜紀人だけになった

「やつといなくなつたか・・・」しばらくして傷が治り、亜紀人も準備した。

### 脱衣所

「結構広いな・・・」

脱衣所にしては広く、40人ぐらい居ても大丈夫ぐらいな広さだった。

亜紀人は服を脱ぎ、腰にタオルを巻き、温泉の所に行った

結構広いな・・・さすが温泉の町・・・

温泉は屋内と露天風呂の二つがあった。

せっかくだから露天風呂に入つとくか・・・

亜紀人はペタペタ足の音を鳴らしながら露天風呂に行った。

### 露天風呂

露天風呂は石風呂風になっており湯気が良い感じに出ていて結構良い感じになっていた

亜紀人は腰のタオルを取り、風呂の中に入っていた

温かいな〜・・・少し奥まで行くか・・・

亜紀人は奥へと歩いていった。奥へ行くと湯気がたくさん出ており視界が悪くなっていた

誰かが岩を背もたれにしていた。

人居んじゃない・・・話しかけてみるか。

「あの〜」亜紀人は声を出しながらその人の肩を触った。

あり？　なんか柔らかいぞ・・・まさか・・・

その人は振り向き、その時湯気が風で流され、視界が良くなった。

その人は、全裸の薫で、　亜紀人の姿はタオルを取っていたため全裸だった。

すぐに亜紀人は気づき、後ろを向き顔を真っ赤にしていた。

「おい・・・どういう事だ・・・」

周りを見渡すと壁に案内があった。そこにはこんな事が書いてあった。

・ ゆっくり湯船に入りましょう

・ 泳がないでください

・ この露天風呂は『混浴』です

　え？混浴？・・・

「はあ！？混浴だと！？別々になってんじゃないの??？」

亜紀人は慌てて屋内温泉に戻ろうとした時

薫が亜紀人の背中に手を付いていた

「一緒に・・・はいろ・・・」

薫は顔を赤くし、耳まで赤くなっていた

亜紀人は少し戸惑った。

「分かった・・・少しだけな・・・」

亜紀人は頷いて温泉に入っていた。

薫も体にタオルを巻いて入っていた

話をしながら温泉に浸かっていた

「大山たちは大丈夫かな・・・？」

「大丈夫はいよ・・・まっ・・・横浜に帰っていったみたいだけ

どね」

「そっか・・・月綺麗だな・・・」

すっかりと暗くなった空に綺麗に輝いている月があった

亜紀人はその月を見つめていた

「そうだね・・・早くあがるっ・・・」

薫は湯船から出て、女風呂に戻っていた

亜紀人も湯船から上がり、男風呂に戻っていた

## 202号室

亜紀人は寝転んでPCを起動させてオンラインゲームをしていた

薫は部屋にあったテレビを付けて、アニメを見ていた

アニメが終わると亜紀人の所に行った

「あきとは何してるの？」

「ん？ ああ・・・これの事か・・・これは3Dビジョン『SWOR  
DSTORY』結構面白いんだよね。」

亜紀人は笑いながら言っていた

『SWORDSTORY』は2026年のNO1MMORPG5年  
連続のランキングトップ

ユーザー数は全世界で2000万人がしている。

職は・双剣使い　　・盗賊　　・スラッガー　　・デュアルウ

エボン

- ・重剣使い
- ・双銃
- ・魔法使い

初心者向けなのは双剣使い、スラッガーである  
元々の素早さや、攻撃力が高いからである  
しかしスキルの種類は普通は100以上あるが50〜60ぐらいし  
かない

一番難しいのはデュアルウエボン

ステータス振りは難しく、基本能力が低い

だが、機動性はどの職よりも速く、2つの武器を使用できる

武器変更が一瞬で終わる、スキルの数は無数の組み合わせで決まる  
やる人も多いが、育てにくいいためやめていく人も多い。

ユーザーの5%しか満たない

なんといつても特徴はフルダイブシステムとスキルシステムが特徴  
である。

フルダイブシステムはUSBヘッドギアを着け、精神をゲーム世界  
にインプットができる

これにより、ゲームの世界観は現実世界に等しいぐらいのクオリテ  
イをだせる

だが従来のキーボードでの操作も可能である

スキルシステムは対人戦になったときに使えるシステムである  
スキルシステムはコマンドを入力をすれば対人用のスキルが使える。

ただし、ソードスキルしか使えないため、魔力型のプレイヤーは  
大きなハンデを負うことになる。

「へえ〜・・・なんか面白そうだね ちよつと見せて」

薫は亜紀人のPCの前に顔を入り込ませた

そこには街があり、人が賑やかに商売したり踊ったりしていた  
画面の前には黒い服を着た亜紀人の顔のキャラが居た

「すごい・・・亜紀人そっくりじゃん」

亜紀人はキーボードを手に取った

「ちよつと画面見えないからさ・・・そつち行って・・・」

亜紀人は薫の顔を少しどかして、ポータルの前に移動した  
「ゲートアップ！」亜紀人のキャラは瞬間移動をし、  
いつの間にか暗い森の中に居た  
「うん……万死ノ森ノ笑イ」のクエスト場所はここがいいよ  
な……」

亜紀人はクエスト情報を開いた

その時、PCの電源が落ちた

「あつ……電池切れか……」

亜紀人は慌ててバックの中をいじった

だが充電器はなかった

「忘れてきたか……」

「せつかくの旅行なんだしさ……お料理食べにいこ」

「それもそうか……確か1階にあるんだっけ……」

亜紀人達は1階にある食堂に行った

## 食堂

「結構綺麗だし広いな……」

食堂は綺麗に掃除されていて10人ぐらいが座って食事をしていた

「え〜と……予約してた清水ですけど……」

薫は会計の人に言った

「清水様ですねお待ちしておりますこちらの方に付いていてくだ

さい」

そこには優しそうなウェイトレスが1人居た

亜紀人達はウェイトレスに案内された

その席は和室になっていて個室だった

「どうぞごゆっくり」

ウェイトレスはすぐにいなくなった

亜紀人達は個室に入ってしまった

「何にしようかな……」

亜紀人はメニュー表を手に取り出した

「せつかくだから刺身でも頼むか・・・」

「私もそうしようかな」

呼び出しボタンを亜紀人が押して、すぐに同じウェイトレスが来た  
「ご注文は？」

「鮪の刺身と鯛の刺身を2人前とご飯を2つお願いします」

「かしこまりました・・・少々お待ちください」

ウェイトレスの人がすぐに去っていった

「けどこない所良く取れたな」

「お父さんたちが取ってくれたんだよね・・・」

「そうだったのか・・・」

「まあいいや・・・どんな料理が出てくるのかな・・・」

亜紀人は寝転んだ

「そうだね・・・お父さんたちも余計な個室なんか用意して・・・」

「

その時だった、亜紀人のケータイが鳴った

「E M A I Lを受信しました」

亜紀人はケータイを取り出すと差出人は不明だった

「誰だろ・・・」

メール内容はこうかかれていた

D E A R 亜紀人

突然ですまない・・・私の名前はクリス

7月29日に成田空港に来て欲しい

今日にでも届いてると思うが家にフランス行きの手ケットを送っていた

先に蓮君が来ている

フランスに来てくれ

-----E N D-----

「クリスマス？誰だ……フランスに來い？……」  
亜紀人は驚いた

「ちよつと見せて！」 薫は亜紀人のケータイをとった

「え……明日じゃん……」

その時だった。薫のケータイがなった

「電話です 電話です」

薫のお母さんからだった

「お母さんなんか用？」

「なんかあなた宛に外国から手紙が來てるわ……」

「誰から?!」

「差出人はクリスマス・ウォーカー フランスからね……」

「中には何が入っていたの？」

「フランス行きの手ケット……あなたの友達？」

「マジで?! 分かったありがとう」

薫は電話を切った

「私にもフランス行きの手ケットが届いてる……」

「マジかよ……明日だよ……明日早く帰って準備して行

こう」

その時、料理がでてきた

「その前に飯にしよう」

亜紀人はでてきた刺身を食べていた

「それもそうね」

亜紀人達は料理を食べて、会計にいき部屋に戻っていった

すぐに布団をひき寝ていた

「明日なんか楽しみだな……」

「そうだね……明日早いから寝るねおやすみ」

「おやすみ」 亜紀人達は眠りについた

そうして朝の4時になった

「よし、行こう……」

亜紀人達は荷物を持って横浜に向かった



## フランスへ

ドラゴンは体中から魔力を膨大な量を放っていた

亜紀人は再び鞘から刀をひいた　だが天使化はしなかった

「やべえ・・・魔力が・・・」

亜紀人からの放たれる常時帯びている魔力がなくなっていた

亜紀人は刀をドラゴンに向けて構えた

そして魔法を唱えようとするが体に次々傷ができて血が飛び散ってる

「ぐっ・・・無理か・・・」

亜紀人は地面に膝を着き、血を吐いていた

力を振り絞ってドラゴンに刀を向けるがすぐに刀を地面に落としてしまう

その時だった、薫は自分の手の前に魔法陣を組み込んでいた

「敵を蹴散らせ！　水弾！」　魔法陣から大量の水の弾がドラゴンに向けて発射された

だが、ドラゴンは火のブレスで水の弾を一蹴した

ブレスは薫を襲うが薫は一瞬にして水の盾を創り出し、ブレスを防いだ

しかし、水の盾は蒸発し、薫は直撃した

薫は少しの火傷で済んだが、頭を打ったのか気を失ってしまった

ドラゴンは薫にとどめをさそうするときだった

亜紀人から黒い魔力が帯びていた

亜紀人は無表情で立ち上がり、傷が消え刀が鎌に変わっていた

髪は長い白髪になっていた

鎌からは異様な魔力が放たれ、帯びていた

亜紀人の黒い瞳は蒼い瞳になっていた

その姿はまるで別人のようだった

ドラゴンはその魔力を感じたかのように一歩後ろに下がった

「てめえ・・・薫・・・を・・・許せねえ」

亜紀人は鎌を回した

周りには風圧で砂が巻き上げられていた  
そして地面が魔力によって地割れを起こし、周りの地面が浮いていた  
薫は立ち上がり、亜紀人の元へ走った  
だが恐るべき風圧で薫は吹き飛ばされる

「覚悟しろ・・・ドラゴン!!!」

亜紀人は風圧を鎌に装填し、鎌からは龍の頭の形をした魔力が帯びていた

龍の頭の形をしたそれは生きてるように動いていた

「行くぞ!!! これが限界突破だ!!!」

亜紀人は鎌を横に振った

鎌からは巨大な風が発生し、周りの木とかを巻き上げていた

ドラゴンは風に必死に耐えていた

その時、風の中から亜紀人が鎌を構えた状態で出てきた

「これで終わりだ!!! ドラゴン!!!」

鎌を縦に振り大きな風の斬撃を放った

ドラゴンは吹き飛ばされ、気を失った

亜紀人は森の方に落ち、地面に足を着き、鎌を刀に戻った

蒼い瞳は元の黒い瞳に戻った

白い髪は黒く染まり、長い分は消滅した

しかし、亜紀人の顔には背中の術式の文字が伸びて、頬に少し侵食されていた

だが、それもすぐに消え、術式も正常になった

亜紀人は膝を着き、息が乱れ苦しそうにもだれていた。

「やべえ・・・『力』を使いすぎた・・・」

亜紀人は痛みには耐え切れなくなり気を失った

薫は眼を覚まし周りを見渡した。そこには木をなぎ倒され、地面はめくり上げられ

まるでクレーターのようになっていた

ドラゴンは完全に気を失っていた

「亜紀人……どこ……」

薫は亜紀人の姿を探していた　だが亜紀人の姿は見当たらなかった  
その頃亜紀人は近くの森に居た

森の中で死んだように気を失っていた  
常時ある魔力も帯びてはいなかった

体中から血がでており、瀕死の状態だった

やべえな……本当に死ぬなこりゃあ……

亜紀人は少しだけ意識を取り戻していた

だが、目をあけるところまでの状態ではなかった

亜紀人は体を動かそうとするが無駄だった

動かそうとすると関節から出血と激痛が出たからだ

ほとんど動けない状態だった

力を使いすぎた……俺死ぬのか……そんなのいやだ……生きるんだ！　絶対に！！

亜紀人は気を失った

しばらくして亜紀人は眼を覚ますと、飛行機の中に居た

「あれ？　怪我がなくなってる……どうしたことだ……」

「さっきの戦いはこの箱の中で起きました　だけど精神世界みたいな  
なものですから　肉体には影響はないんですよ」

黒いスーツ男は笑いながら言った

「笑い事じゃねえ……殺すぞ！！」

亜紀人は刀を太田に向けた

しかし、亜紀人は薫に取り押さえられた

「だけど……良い経験したでしょ？　滅多に経験できないことを・

……」

「ああ？　どこが良い経験だ！？　ドラゴンに殺されそうになったんだぞ！」

「あゝこの箱の中で死んだそのときは体は屍になっちゃうんでした  
忘れていました」

「忘れていましたじゃねえ！！！！！！」

10分ぐらい亜紀人は暴れていた

疲れたところを取り押さえられてイスに結ばれていた

「こらあ！！ 外せ！！ この鎖を！！」

「こんなこともあるうかと魔法封じの鎖を用意しといて正解でしたね クオンさん」

太田はガードマンと話していたその時だった、アナウンスが流れた  
「現在フランス上空・・・着陸します、シートベルトを着用してください」

薫、太田はシートベルトをつけた

亜紀人は押さえつけられていてつけられなかった

そして少し揺れたが着陸した

そして空港のパスポートチェックもすぐに終わり、準備していた車に亜紀人達は乗った

「散々な目にあっただぜ・・・押さえつけられるは死にかけるし・・・  
・・・」

亜紀人は頭をかきながら言った

パリの街は綺麗で、人が東京と比べ物にならないぐらいいた

しばらくすると森の中に入っていき大きな屋敷に入っていた

「でけーな・・・この屋敷・・・」

亜紀人達は車から降り、屋敷の中に荷物を持ちながら歩いていった

「お初にお目にかかります、 柊亜紀人様 清水薫様

私めはクオン・ドロップ 使用人でございます」

髪の毛の長い執事が出迎えてきた

「どうも初めまして・・・」

亜紀人は作り笑顔で言った

「すみませんね・・・亜紀人様・・・駄目な太田が・・・お手数をお  
掛けしまして・・・

謝罪をここに示します」

執事はお辞儀をした

「いえいえ アイツ・・・俺らを殺そうとしたからなあ・・・あん

な箱の中で死んでたまるかって」

亜紀人は笑いながら愚痴を言ってるとき、後ろから恨みのオーラを感じた

亜紀人は振り向くと怒りを隠しきれない太田が居た

太田は後ろポケットからナイフを取り出そうとしてる、俺を始末しようとしてるはず

亜紀人は咄嗟に臨場体勢にはいった 刀を鞘から抜く準備をしていた 太田は魔法名を一瞬で唱え、亜紀人の後ろに居た

そして太田はナイフで亜紀人に斬りかかった

しかし、亜紀人は体を反り攻撃から避けた

「何するんだ！！ 殺す気か！？」

「何をおっしゃいますか・・・亜紀人様 私は貴方様の周りを飛んでいた虫が気になりましてね」

太田は微笑みながら言った

嘘をつけ・・・俺を殺そうとしただろ！ あれは確実に魔法も使ってたし・・・

亜紀人は太田に睨みつけた

「はぁ・・・さて・・・クリスマス様の所へお連れしましょう」

クオンは内ポケットから黒いクリスタルを取り出した

クオンはそして魔法陣を展開した

そのクリスタルをクオンが魔法陣の中心に置いた

「瞬間移動・・・」

一瞬にして亜紀人達は森の中に居た

「なんだよここ・・・」

「ここはクリスマス様の所有の山の中でございます」

クオンは先頭に立ち亜紀人達を案内していた

「で・・・蓮は何してるんですか？」

亜紀人はクオンに尋ねた

「クリスマス様のトレーニングを受けられているはずです」

10分ぐらい歩くと突然大きい公園らしき場所にでていた

「ここは・・・?」

「ここはですねクリス様が作ったトレーニング場所ですね・・・何処かにいるはずです」

亜紀人は周りに魔力を集中した

森の魔力やら生命反応が感じ取れる技の一つである

「蓮達は・・・」

その時だった、誰かが公園の奥から恐ろしい程の速さで亜紀人の前に飛んできたのである

それは上に飛び上がり、また黒い影がそいつに突っ込んできた

周りには魔力の衝撃波が放たれていた

「誰だ?・・・こんなでかい魔力は・・・」

亜紀人は目をこすって上に飛んでる人を見た

その人は蓮だった

蓮は黒い影を殴りで地面に叩き落した

黒い影は少しひるんでいた

その時蓮は止めの魔法を放とうとしていた

「火龍邨尊!!!」

蓮から火の龍が召還され黒い影が落ちた場所に突っ込んだ

蓮は黒い影を確認し

そして蓮は上からゆっくり落ちてきた

「おお! 亜紀人・・・なんでここに?」

蓮は亜紀人の事に気づき火の翼で飛んできた

「蓮・・・お前何してんだよ?」

「いやぁ・・・なんかさぁ・俺にもよくわからないんだよね」

蓮は頭をかきながら言った

「どういうことだよ??」

「いや・・・いつの間にかここに居たからさ・・・」

「それは私が創りだした魔法・・・『瞬間移動』で呼び出したからさ」

亜紀人の後ろから女の声が聞こえた

亜紀人は後ろを向くと20代ぐらいの170cmはある女性が居た

「瞬間移動は私がつくりだしたスキルの一つなのだよ．．．亜紀人君」

「お前は何者なんだよ．．．俺の名前まで知ってるしよお」

「すまんすまん・私の名はクリス・カレンデュラ　スキル開発者兼情報屋だ」

クリスは笑いながら言った

「スキル開発者？つてなんだよそれ．．．そんな職業初めて聞いたぞ？」

「一般的には開発者かな．．．私の仕事は『魔法を開発、改良』をすることだ

まあほとんどは没だけだな」

じゃあ．．．さっきの瞬間移動もか．．．

「それはそうと．．．蓮君来て！」

クリスが蓮の名前を呼ぶと蓮は一瞬で亜紀人の前に立っていた

「なんですか？　クリスさん」

「蓮君．．．亜紀人君と戦ってくれ君の最終試験だ」

「亜紀人と？．．．分かりました」

蓮はナツクルを装着し、亜紀人を掴んで一瞬にして公園の中央に移動した

蓮は亜紀人を放すと亜紀人に向けて蓮は構えた

「亜紀人．．．構えろよ　俺の修行の成果みせてやるよ」

亜紀人は刀を鞘からだし、天使化した

そして亜紀人は刀を地面につけた

「ああ．．．そのつもりだ」

「行くぞ．．．亜紀人」

蓮はそう言った途端、亜紀人の前に居た

亜紀人に殴りかかるが亜紀人は体を横にし、攻撃を避けた

尽かさず蓮は亜紀人にラッシュを繰り返すが亜紀人は全て避けた

亜紀人は刀で蓮の胸に突き出しをするが蓮はジャンプしその攻撃を避けた

亜紀人もジャンプし、蓮に刀を振った

だが蓮は刀をナツクルで受け止めカウンターを狙うが亜紀人は一瞬だけ魔力で足場を創り

足場を使い、またジャンプし、攻撃を避けた

蓮、亜紀人は地面に着地をした

「なかなかやるじゃん 蓮」

「亜紀人も」

蓮、亜紀人は笑顔で言った

「んじゃ……本気でやるとするか……」

蓮はナツクルに魔力を集中し、魔力を手に集中した

## フランスへ（後書き）

少し長めにしてみました

なぜか連と戦う事になったのは作者も分かりませんw

## 第14話 亜紀人VS蓮

蓮はナツクルに魔力を込め、魔法名を唱えた

「火竜塵！！」ナツクルから火の竜の頭が出てきて亜紀人に襲った  
だが、亜紀人は刀を回し、魔力を込め、魔法名を唱えた

「天使の鏡！」 白い鏡が召喚され、攻撃を防いだ

亜紀人は神速を使い、蓮の懐に入った

しかし、蓮は亜紀人の後ろに回っていた

そんな馬鹿な……

蓮は亜紀人の右頬を殴り、吹き飛ばされた

亜紀人は白翼を出し、体勢を戻した

刀を蓮に向け魔法名を唱えた

「天使ノ技……其の十二……『純白の羽』」

亜紀人の前に白い羽が無数に現れ、蓮の視界から亜紀人の姿が消えた  
亜紀人は無数の羽の中から蓮を襲った。

だが、また蓮の姿がなくなり、亜紀人は後ろから殴られ、飛ばされる

どういうことだ？ なんで攻撃を……かわされるんだ……？

亜紀人は地面に着き、体勢を戻したが、後ろに蓮の姿があった

速過ぎだろ？?!

蓮は亜紀人の頭を掴み、地面に叩き付けた

亜紀人は天使化を解き、普通の人間に戻った

なんで……天使化が……解けるんだ？

亜紀人を掴みながら蓮は微かに魔法名を唱え、クリスの元に行った

「おお！ 蓮君の圧勝だね」

クリスは笑いながら蓮の頭を撫でていた

「おい……クリスさん……蓮に何を教えたんだ??」

亜紀人はクリスに問いかけた

そうすると、クリスは笑いながら言った

「ああ……さっきのかわした技は『瞬間移動』だ」

「瞬間移動？ どういうことだ？」

「瞬間移動は私が作り出した最高傑作さ」

「思い出した！」

薫は驚いたように言った

「亜紀人・・・その人・・・魔法開発者最高職のクリスマスさんだよ！」

「おお！ 薫ちゃんよく知ってるね！」

「はい！ あの異界開発の第一人者ですよね！」

「ええ ありがとうございますね」

クリスマスはおじぎをした

「話戻すけど・・・瞬間移動は本来異界転送に使ったために開発したんだ

しかし、大人数での移動はできず最大でも4 5人しかできなかったんだ

しかもうまく扱わないと多くの魔力を消費してしまう・・・非常に燃費の悪い魔法なんだ

だけど蓮君は上手に使い方を掴み、少ない魔力でも瞬間移動ができるようになったんだ！」

クリスマスは興奮して熱演をした

「じゃあその瞬間移動・・・俺にも教えてくれないか？」

亜紀人は土下座をし、お願いをした

「私もそのつもりだ・・・だから呼んだんだ」

「え？ どういうことだよ？」

「詳しくは私の屋敷で話す」

クリスマスは魔方陣を展開した。そして大田やクオンが魔方陣の中に入っていく

蓮は俺と薫を掴んで、魔方陣の中に入った

そして魔方陣が光り、一瞬で大きな屋敷の前に立っていた

「でっけー・・・」

亜紀人は驚きのあまり絶句していた

「まあ中に入って」

クリスは扉を開け、大広間に出て、みんなをイスに座らせた  
大広間には大勢の中学生達が集まっていた

そしてクリスが話し始めた

「君達をここに呼んだのは他でもない……」

クリスは真剣な表情で言った

「それは……君達に世界を救ってもらうことだ……」

子供達にどよめきはしった

その中の一人がクリスに問いかけた

「あのう……なんで僕達を集めたんですか？」

「ああ……説明する……世界を破滅させようとする組織が動

き始めている

そしてつい最近……その組織が女王の石を盗んだんだ」

「なんだと!？」

子供達（亜紀人以外）はおどろいていた

女王の石とは天使の女王の魔力と記憶が内蔵された魔法石である

だがこの石の魔力は膨大で使うものはほとんどが死に絶えたという

なんせ女王の魔力が直接からだの中に入ってくる「拒絶し体が壊れ

るという事になる

だが、一回だけ強大な魔法が使えるようになる

「じゃあ……その組織は……まさか?!」

子供達の一人が問いかけた

「ああ……そのまさかだ……『終焉の王』がリーダーだ」

「つ!!!!!!!!!!」

また子供達が驚いた

「終焉の王は……次に狙ってるのは『魔王の石』だ」

「魔王の石……あれは確か地下1万メートルの穴に封印さ

れているのでは？」

「終焉の王はそんなものともしない……あいつは最強だ……

……この世界で一番強い……」



「まあ覚えてもらおうスキルは『瞬間移動』、『真・天使ノ技』つても

『真・天使ノ技』は危険すぎるからまだだがな」

「瞬間移動??？」

「ああ・・・ちよつと蓮君来て」

蓮はクリスの元に歩いてきた

「じゃあみんな！見て」

蓮はクリスのところから一瞬で扉の前に移動した

「なんだ!!?? 見えなかつたぞ!!??」

「なんだあのデタラメな技は!!?? すごい!!??」

みんなの驚きと歓喜の音が響いていた

亜紀人もそのすごさに絶句した

「・・・」

「すごいだろう・・・亜紀人君・・・」

「・・・ああ・・・」

「蓮君はキミを超えるために練習してきたんだ・・・今はたぶんキミ以上の力を持っている」

クリスは亜紀人に向けて小さな声で言った 亜紀人は顔を下向けて黙った

亜紀人はイスに腰を掛けて言った

「じゃあ・・・俺は蓮を超える・・・蓮にできたなら俺だってできるはずだ・・・！」

亜紀人はコブシを握って真剣な目で言った

クリスは少し微笑んだそしてクリスは口をあけた

「だが・・・この技はセンスが必要だ・・・できるか？」

クリスは冷たい言い方をし、言った

亜紀人の答えは

「もちろんだ！ やってやる！」

亜紀人は笑いながら言った

第14話 亜紀人VS連（後書き）

しばらく投稿するの忘れていました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9831p/>

---

エンジェルストーリー

2011年6月6日04時41分発行